WASON
HQ
1104
J74+

Feb 22
1890
no. 201

女學雜誌

第二百一號目次

社説　禽獸歎
論説　幾多の非廢娼論、角田眞平氏に答ふ
文學は男子の天職に非ず（老川居士）
批評　ベルッ氏女子教育上の弊害○琉球淨瑠璃○つぼみ○万國娼妓沿革
雜録　特に當代の文學者に望む○離婚の可否、グラッドストンの説○和歌よみ方（鈴木弘恭）○本邦男女婚姻の年齢○上州記行○早起のとに就て○若殿原に物申さん○馬の爲めに道を敷く○腦の養料○きよめぬ庭
小説　イナック、アーデン物語
寄書　水車と姦婬公許○小説に付ての述懐
開書　○流行
時事　交詢（當今小説家の實名）。日本婦人○米人吾等が同胞姉妹を評す○政黨に入りがたき人種○東京の監獄○天上天下○嗚呼ラスキン氏！○世界週遊兩女子○惡しき寒冒
女報　アッカルマン孃の肖像
女官位階を進めらる○大和きよ子の慈善○今治婦人倶樂部○堺婦人會○婦人傳道會○神戸英和女學校○おさんの友○女子演説○神戸の幼稚園○長榮女塾○ジョアン、アークとナイテンゲール

"IN ALL TRULY GREAT MEN, A FEMININE ELEMENT MAY BE DETECTED"—COLERIDGE.

通信女學第一卷**再版**

通信女學第二卷去十一日發兌

家に在りて晩年婦人が**獨學**するに最長の**女學**書は此の通信女學に超ゆるものあらじ

本日來着すべき第二のレビット**アツケルマン孃**の肖像は此の女學雜誌にあり。

二月廿二日發兌　第二百一號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 201. 22ND FEBRUARY. 1890.

EDITORIAL:—Kindness to Animals. Several Kinds of Anti-abolitionism.

LEADING ARTICLES:—Literature is not the sole Monopoly of Men.

CRITICAL NOTES:—Dr. Belt's "Evil Effects of Female Education." "Ryukin Jorui." "The Blossom." "History of Prostitution in different Countries of the World."

MISCELLAOEOUS:—Special Expectation from literary men of the present time. Mr. Gladstone's Opinion concerning the Divorce. How to read *Waka*. Ages of men and women at which they marry in Japan. Recollection of a trip to Jōshū. About early Rising. A word to Young men. A woman who repaired a road from a kind motive to horses. Nourishment for Brain.

NOVEL:—The Story of Enoch Ardene.

CONTRIBUTED ARTICLES:—The Water-mill and Licensed Adultery. Thoughts about Novels.

OPEN LETTERS:—

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

前號目錄

社説 慷慨の價値何文錢ぞ○廢娼論に對する種々の異論（一）

論説 詩歌を學ぶの効用（霄峯子）

批評 ベルツ氏女子教育上の弊害○小學毛筆畫○當世批評家

雜錄 園の怨（蓮華外史）○和歌讀み方（鈴木弘恭）○東京府下名醫の栞○節分○野菜會員の辨解○きよめぬ庭○小兒の食物○雨水、雪水○惡しき空氣小供を殺ろす

小説 イナック、アーデンものがたり

寄書 文學者と法學者○詩五首（柳溪女史）

閑書 食客と献身者との事○女學雜誌の一失○究詢

時事 佛教家と廢娼運動○下宿事業○授産事業○衛生事業○娼風事業○雜宿ヘンケチ○廢娼記事○廢娼論料

女報 婦人衛生會○同志社の爲めの演說會○山縣伯爵夫人○高等女學校長○田中伊興子○東京產婆會○高等女學校撿定委員長○外國婦人女子技術學校○產婆學校○万國監獄會議○大日本帝國水難救濟會○淸國公使夫人

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Miss Jessee A. Acherman, Secretary of the Women's Christian Temperance Association of America, whose brief sketch we printed in the 61st number of our journal and who has been travelling around the world, is reported to have arrived on the 5th Inst. at Shanghai from Hongkong on board the M.M. steamer Melbourne. She is expected to arrive at Yokohama to-day.*

(2) *Some time ago we learned with some surprise and regret that some Buddhist priests and believers were in opposition to the movement of the abolition of licensed prostitution, which is astir all over the country. Recently, however, a few prominent Buddhists formed a society called "Fujainkwai," and several members of the same society delivered anti-prostitution lectures at the Rinsho-in, a Buddhist temple in Tokyo, on the 9th inst. We are very glad to think that not only the Christians, but some of the Buddhists are co-working for the same cause.*

(3) *Mrs. K. Kojima is intending to start a good Christian temperance boarding house in Tokyo. The town, being crowded with several hundred thousands of students from all parts of the country, there is just the need of such bourding houses here in Tokyo.*

(4) *On Tuesday, the 11th, the anniversary of the Coronation of our First Emperor, Jimmu Tenno, and of the proclamation of the Constitution, some 100 members of Y. M. C. A. made an anti-prostitution demonstration at the park of Ueno, Tokyo. Notwithstanding the heavy snow-fall, they marched in procession to Yoshiwara and Ginza. There was much shouting in favor of the abolition, but no disorder.*

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第十貳卷　第二百一號

明治二十三年二月二十二日發兌

社說

○禽獸歎

吾人嘗て津田仙翁と共に豆州三嶋に遊び、途中路上の馬車を雇ひて乘りたることあり、行くこと幾干もあらず、御者連りに馬を鞭撻す、馬は例の如く眼この左右に目かくしを付られ、后りへに重き車を引きて、一意たゞ前途に向ひ行くのみ、然るに鞭聲粛々として、臀骨露はに出る上を連打せられ、飛び上りて躍跳疾走す、その樣痛困に堪へずたゞ苦しみを忘れんとして驅けるに似たり、車樓搖動し、輪の響き轆々たり、而して御者尚ほ鞭を揮ひ、登る坂、下る谷、石しける磽地、泥深き濘地をまつしくらに走らせ、意氣揚々として吾馬此如く早しと誇る、馬は勢氣既に失せ足弱く頭垂れたゞ打るゝによりて走るあり、仙翁涙漣々泣いて御者を止むれば彼れ冷笑す、蓋したゞ同業者と競走して其馬の疾きを誇らんとし馬の遂に倒るゝをも顧みざるなり。吾人此時痛歎して云へり、嗚呼人間の己がじゝに馬を御する、而も尚ほ如此く殘酷に之を御すると抑そも何の權力あるに由りて然る乎と、仙翁と共に嘆げき止むことなかりき。

佛國の志士ボルテーア嘗て歎じけらく、嗚呼何人か禽獸を以て智感なきの器械と爲すや、彼等に存するの感情は感ぜざる爲に存する乎、彼等に備はれるの神經は苦樂を覺らざる爲に備はれる乎、嗚呼彼等が尾を振り又た高く嘶くは其の樂しき時にして吾等が父母同胞を見て喜こぶの樂しきに何の違ふことありや、此時に於て人之を殺ろし試驗臺に張付け、冷々として解剖し、云く此れ人間の爲に益を爲すと、嗚呼禽獸は何によりて如此く虐待せらるべきの義務ありやと。

世人皆云ふ、人は万物の靈なりと、万物の靈は万物を虐待するの權ありや、鴛鴦睦まじく池水に浮ぶ人は何の權ありて其を殺ろし彼等が愛情を痛むることを得る乎、燕雀戯むれて枝頭に囀づる人は何の德ありて之を殺ろし彼等が樂しみを破ぶることを得る乎、漠然として云ふ吾は万物の靈長なりと、吾人は斯る殘酷なる靈長に服する能はず。

ワルター、スコット幼けなきとき途に犬を見、戯むれに石を執つて投ず、石其の后足にあたりて傷つけ犬思はず叫びてスコットを噛みたり、スコット卒然感發し大に悔ひけるやう嗚呼われ何の優る所ありて犬を害するを得んと、此時より彼は尤

犬類に信切なる者となりぬ、其畜ふ所の犬マイダ、ニムロッド、プラレン等は彼が最愛の友にして、皆彼が戯作中に出たり。

セヲドル、パーカー、一日湖頭に立ち、龜の浮ぶを見て石を投ず、時に忽然聲あり汝ぢ何事をすると叱す、聲は心中最も深き處ろにあり、彼れ大に煩らひ歸りて母に問へらく此れ何の聲にて候、母の云く即はち此れ良心の聲にして汝ぢが心に宿れる神の命旨なりと、嗚呼此の一瑣事はパーカーが終生に於ける最大の出來事となりぬ、彼れ后年に至りて云へり、此時は即はち余が一生の方向を決斷したるの時機なり、此よりして初めて永遠の靈の神聖なることを覺りたりき。

蓋し是れ人情の至誠至眞なる處ろか、吾人靜かに默想沈思するときは、ハタと思ひ至りて常に如此く感ぜざるとなし、昔しラレーは荒馬を買へり、馬よく人を蹴り人を害す、然れどもラレー特更に其頭らを馬の后足に着け、本心他意なきとを示すに於ては誠意亦た此の荒暴の野獸にだも通ぜずと云ふとなし、馬は俄然溫良となりラレーが爲めに極めて柔順なる乘馬となりぬ。馬あに情なからんやたゞ人の之に情を通ぜざるを憾みとするのみ、玄德檀溪を越へんとす、危機慷歎して訴ふるときは馬亦た之が爲に應ふ、知盛舟に乘じて馬を棄てたり、馬知盛を棄てたるにあらず、尙ほ渚に立ち三鳴して別を惜めり、嗚呼獸畜果して無情なるか、抑そも人無情なるか、吾人は世人が大率ね殘酷冷淡なるを見て、禽獸の寧しろ極めて愛すべきとを思ふ。

エルリントン公戰かひ勝ち、戰馬を休ませて一生の扶持を給し、之を終身平安に終らしめよと命じたると、何等優しきの情ぞ、英雄は嚴めしきのみにあらず、人は皆な斯る女々しきの情けありたきもの也。

吾人は必らずしも好みて極端の論を爲ものにあらず、左れば敢て佛者に傚らひて一切殺生する勿れと云はず、亦た菜食會員に同じて惣べて肉食を禁ぜよとも云はず、若し適宜に馬を御し又た必要の限り肉を獲るの處置を爲さば之れ反つて天然の理法に遵ふものと云ん、左ば彼の特更に獸類を虐待するもの若くは戯れに禽獸を殺して慰さみと爲ものに至りては、吾人之が爲めに痛恨して極まるとなし、ヒアワサ鳥を射んとすれば鳥は歌ふ、ヒアワサよ吾を射ると勿れと、羅馬人獅牛を戰わすれば獅牛倒れんとして天に吼へ、神よ汝ぢが子等如此しと訴たふ、嗚呼人類よ汝ぢ若し慰さまんとを欲せば遊獵の外に尙ほ幾多の樂しみあらん須らく去つて之に從ふべし、又

汝ぢ若し疾行を要せば海陸ともに滊關あり何如斗りにも之を利用するを得べし、汝ぢ若し貴族的の壓制に慣ふるとを知らば汝も亦た禽獸を虐待すると勿れ、汝ぢ之を打つも吾を訴へず之を殺すも吾に復讐せず、而も訴ふるに舌なく仇を復するに身方なき禽獸の甚はだ憫れむべきとを知らば、乞ふ先づ少しく其慾情を制せよ。シエクスピア、ボルシアに假つて云く、慈悲の德二つ、惠まるゝものゝ之に益し惠むもの亦之に益すと、經に云く、汝ぢ只善を爲せよよし人之を受けて幸はひせざるも祝福は其善行者の上に反らんと。吾人は只だ禽獸の爲めにのみ之を言ふものにあらず亦た人類自身の善に進まんとを祈りて如此く言ふ、世人宜しく亦た禽獸にも信切なるべし。

○幾多の非廢娼論 （二）

問　長谷川泰氏の御論に付きては既に承はり候、之に續づき何如なる人が尤も強く廢娼論に反對せられ候や。

答　今日迄で承はりたるにては、角田眞平氏が能辨學會に於ける演說（能辨第一號雜記掲載す）、及び讀賣新聞昨年十二月四日以後七日に至る社說は、即はち其の尤も名あるものと覺え候、但し之とても純粹の反對論にては無之、只だ廢娼を徐々にして其斷行年限を遲くせんとの主意に止まるものゆへ、寧ろ漸次の廢娼論とこそ云ふべけれ決して存娼論と目す可き者にあらずと考へられ候。但し其の年限に達する迄は決して廢娼す可からずと論ずるものゆへ、目下直ちに廢娼せよと主張するの斷行論より見れば、亦之れ右年限間の一種の存娼論と稱へて然るべく候、故に之を廢娼論者中の假の存娼論者と見做し、彼人々が何故に目下直ちに斷行しがたしと掛念するか其掛念とする所ろの實は杞憂なるとを辨解し、即はち彼諸君が直接斷行論に反對するの反對論を打破するときは、彼等は喜んで斷行派に加擔すべく、此時に至れば直ちに純粹の廢娼論者となるとに候、故に其反對、言ひ換ゆれば其掛念を辨散し參らするとは彼我兩方の爲に有益の儀と存ぜられ候。

問　何如にも然るべく候、左らば先づ角田氏の御論より承はりたく候。

答　角田氏の論は前部後部に分ち、前部には斷行派廢娼論の說を樣々に攻擊し、後部には同氏自信の廢娼方法を講ぜられたるとに候。然るに廢娼の方法論に付ては后日又々諸君の立策を一まとめにしてお話し可申に付、只今は其前部の反對論

のみを辨解いたすべく候。　其の反對論は都合八段にして、滔々懸河の辨溢れて千万の語と相成り居れば、茲には其精髓を抜きて反對の御精神を一々畧表し、之に極めて簡畧なる答論を併せ記すべく候、（難は角田氏の反對難にして答は吾人が之に對するの答）

難　吾々が名說と云は其世の中に實行すべき者にて後世に行はるゝと云ふとにはあらざる譯なり、吾々の採て以て名說卓論と云ふものは常時の世の中に當はまつて實行の出來る政治上の議論を云ふのであり升。

答　コブデン、ブライトの自由貿易說は八年を要し、米國獨立の事業は七年を要し、日本の國會開設は明治六年以后十八年を要して、初めて實行され候、社會には兎角頑固者と臆病者が多きゆへ名論卓說も頓かには行れず候、然し之を預言し宣言し傳道するものあるゆへ意外に速かに行わるゝとと相成るものに候、之は道德上の事のみならず政治上に於ても同樣に候、況んや吾人の信ずる所ろによれば目下直ちに之を斷行し得べしと存じ候をや。又況んや角田君御自身も二三十年后に斷然廢娼し今日より其年限を限り置んと仰せある、此年限を今日より限ると云ふは、即ち目下直ちに廢娼に着手するものにては無之や。　若又之を目下の世の中に悉とく實行するものならねば即ち名論卓說にてあらずと云はゞ、角田氏の準備方案も亦た名論卓說には無之かと覺え候、然し此等の事はどちらにても宜しく候。

難　奴隸とは人身を物品の如くに其人の承諾何如に拘わらず取りやりするとゆへ、娼妓は賤しい事業にてはあれども奴隸となり居るにはあらず。

答　法律上より申すときは勿論左樣に候、法律上實に奴隸にてあらば日本政府は決して許し置くまじく候、今日彼此と申すものゝあるは、只だ道德上より言ふとにて實際の關係は奴隸の如く玩弄物の如くなさるゝと申す迄と存じ候。

難　廢娼論者は娼妓等の事に政府より關係しては成らぬ之を許し置くは關係するのであると云ひ乍ら、之を廢し禁止律を立てさせんとするは即ち亦た一の關渉するとにて、云はゞ小さき關係を止め大なる關係を施すのである。

答　意外の論かな、政府は泥棒を許すなど云ひて之に關係しては成らぬ、然し之を禁ずるは勿論の義務と存じ候、廢娼の法律も亦同樣のとにて、只だ關係するが惡しゝと

云ふに非ず、不德なるものを公許するが惡しゝと云ふとあり。又政府が今日妓樓を公置せしむるは特許を與へるに非ず制限を與へるなり」と申されども、此制限は或る限り迄で許し置くの制限にてあるゆへ此の許し置く部分を全止したしと申す儀に候。

難　政府が妓樓を保護するは、之より租税を取るが爲めにのみ由るのでなく、たとひ租税を取らずとも國法上に禁ぜざる限りは其營業上の保護を與へねば成らぬ。

答　尤もの儀に候、所云る押込強盜破落戸などの這入らぬ樣に保護なさるは當然の事に候はんが、元來娼妓を廢したいと思い乍ら、堂々之が黴毒を檢査し又た妓樓主人の公權を明許する類の保護は抑も利益あるの保護に候乎。

難　男女同數なりとて一夫一婦を主張し、之よりして娼妓を置くとに不同意の方は、若し男女不同數ならば女娼男娼を夫々に置くを御贊成なさるのである乎、然るに實際は男女不同の國が多い。

答　一夫一婦の大道は男女同數の一點のみより許するには無之、勿論之も其の一つの理由とは相成れども決して強き理由には御座なく候、但し男女は概して同數のものにて世上各國に少々の端數のあるとが即はち天然には男女同數なるとを證するものに候、此理數多の辨論を要する儀に候。

難　廢娼後、私生の兒は殖えない、密娼も增さない、黴毒も蔓延しないと云ふのは事實を知らぬ迂濶の議論である

答　右三段に對する答辨は前號（百九十六號より百九十九號迄）に精はしく論じ置きたれば又々同じとを繰返し不申候、只だ一論したきは、廢娼論の中心は、統計表又は一二の實例によりて斷信する者には無之、更に大ある明白なる情理に據りて確信する儀ゆへ深く御再考を請ひたし。又た角田氏は「私の説に反對しやうと言ふならば女郎屋が無くなつてしまつたら密賣淫が無くなつたと云ふ議論を以て來なければ議論には成らぬ」と云はれましたが、即ち私供は左樣に申すので、凡そ密賣淫を減じ、遂に之を無くするの第一着手は先づ公許を止むるにありと存ずる儀に候。

難　曩に親族相姦律と云ふがあつた時には犯罪者が多かりしに今は反つて少なくなつた、之は人智の進みたるに由るゆへ、廢娼の事も斯樣に追々にすれば遂に人が娼を買はざるやうに成るべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

答　今日親族相姦の罪を犯すものが減つたとは何に由りて證せられ候か、昔しに多かりしと云ふは律ありて之に罰を科したる故に多く見へ、今は律なきゆへ罰せられて目に立つものゝ少なきやも知れ不申、但し私供は實に此罪が減じたることと信じたく希望いたすものに候が、扨て若し減じたりとせば、之は先づ親族相姦の惡しきことを法律にて明示したるゆへに候、然るに最初より國民中少數の人が此の卑しむべきことを犯すものありとして、政府が妓樓を公許する如く之を公許し置んには、今日に至る迄で親族相姦の惡しきことを悟るものは之れなかりしことと存じ候、政府にて廢娼を斷行なされと云ふは即はち姦淫の惡しきことを明示成されよと佇望する儀にて、一時親族相姦律を置れたるやうに成さるべしと要むる譯なり、追ては廢娼の令密賣取締の律を全廢し差支へなきこと今日親族相姦律を廢して差支へなきと同様に至るべく候。總じて惡しきことを滅せんとするには先づ之が惡しきこと恥づべきことを知らしむるが肝要に候、政府が娼妓を公許せぬことは即はち此の考を國民一同に懷かしむるの初めにて、即はち漸次姦淫を恥ぢ惡くむに至らしむるの第一歩に候、角田氏が毎度申さるゝには、眞の道德家は上面よりも内面に頓着すべき筈ゆへ、公娼を廢して密娼をさせて置くは寧ろ嫌ふべき筈だと仰せあれども、之は社會道德を進むるの順序を御忘れになりしことと存ず、人は皆な我儘なれども禮と云ふ表面の愼しみありて即はち内心の愼しみをも引起すものに候、内心が亂暴ゆへ有の儘表てに現はすとありては、社會はいつ迄も引しまり不申候、社會の表面を清くするは遂に内面を清くするの初めにて眞正の大道德は左樣に着手盡力することを望むものに候、社會改良家は表面の爲にのみ働らくものにては勿論之れなし、寧ろ内面の爲に働くことを專一とすれども、此内面を清くするには表てに於ても亦敎ゆる所なかる可らず候、家庭には善を爲せよと敎へ學校に於ては惡は少々爲しても宜しと云ふやうなことの無いやうに致したき所望にて、即はち政府が姦淫公許を止め玉ふやうに願ふことを、廢娼禁淫の一手段と認とめ盡力することに候。

論説

○文學は男子の天職に非ず

老川居士

文學の意義如何、文學者の意義如何、固より之を廣博なる邊に付て云はゝ詩なり小説あり滑稽なり諷刺なり説教なり演説あり凡そ人類と人情とに説着して吾人を教る所の者は皆是文學成べく之を教る所の人は皆是文學者なるべしされど吾人は今斯る廣博なる邊に付て云に非ず吾人は特に純正なる點に付て詩と小説とを文學と云ひ詩人と小説家とを文學者と云ふ。抑人間已に ツに分れて男女生れ乍ら其職を異にす豪放と云ひ磊落と云ひ剛毅と云ふ皆男子の天質にして婉美と云ひ精緻と云ひ温和と云ふ皆女子の 性なり一は向外的なり他は家内的なり前者は亂颶强瀾の如く後者は愛日和風の如しされば男子は其性能く大事を決し大難を埋し一劍抜來りて高く天月を睥むが如き雄快の業に堪ゑ女子は其性能く小事細業男子の氣附ざる所を氣附け男子の爲し足らざる所を補ふが如き裁縫的の職に適す故に戰爭墾拓は須く男子に任すべく家政慈善は眞に女子の本業と爲す抑も知らず此文學は如何。蓋し詩と云ひ小説と云ふ凡て文學なる者は皆是思を顯微鏡的の細微に運らし一字一句の間、神を凝らし筆を練りてぞ初て作し得る者にて要する所重に裏面よりし内部よりして人間悲喜の情態を發き万有自然の妙状を描出するにあり故に之が爲に要する性情は豪放より寧ろ精緻にあるべく武骨朴訥より寧ろ優婉多情にあるべく怒るより寧ろ泣くべく働くより寧ろ考ふるべく即ち男子的より寧ろ女子的にあるべし此に至り吾人は斷言す文學は是男子の天職に非ずして寧ろ女子に屬せる本務なりと嗚呼色あり香ある文學の神髓豈色なく香なき者の容易に夢み得る所ならんや。

然るに見よ東西幾千里の裡、古今數千年の間、其文學を以て身を立て其の文學を以て名を顯はしたる者は果して二性何れにか多きぞ大詩宗は如何大文豪は如何男なるか女なるか不思議なる哉吾人此に至りては却て滔々漠々たる文學界殆ど唯男子を以て充たされたるを見る成程偶々希臘の古に於てサツポーありヰリナあるが如き我國の古に於て紫式部あり淸少納言あるが如き纎弱の少女子能く其天眞の本職を全ふせし者之なきに非るも是唯深海の一滴のみ是唯高山の一塵のみ抑知ず之れ果して何によりて然らしむるやぞ。素より之には種々の原因もあらん古來男尊女卑の大弊世界を管配せしが如きも或は其一原因たらん然ども吾人の考ふる所

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を以てすれば其最大原因は蓋し其等に非ずして古今東西幾百千の人間が未だ一人だも女子が文學に勉めざるを怪まざりしに歸せずんばあらざるなり女子已に文學に勉ずして怪まるゝなし故に又自らも文學は女子の職に非ずと思へり故に又文學を顧んともせず此に至りてか宇宙万有は終に止むなく男子をして文學に從事せしむると起る然ども注意せよ文學は決して男子の天職に非ざるなり。

古より世に文學者多し彼等一たび其所謂妙文を作り得るや喜んで曰く是緻密にして能く人情の極致を穿てりと人も亦賞して曰く此人男子に似ざる優婉の想念を有せりと自も誤まり人も亦誤まる當時已に迷ひ今日又迷ふ特に知らず此緻密に此優婉は女子に取てこそ喜ぶべけれ男子に取ては却て半銭の價直もなき者なるを抑も万里大洋鯨波を蹴て遠く無人の島を發見し高山の嶮一身を賭して前途の難に赴く天を撼し地を撼し國家の大難に當り蒼生の危急を救ふ是男子が天より授られたる當に爲べきの義務なり今男子たる者此必需の大義務を盡す能はずして却て一片の紙、一毛の筆に小心細慮唯漸く裁縫的のとそのみ之なす卑劣も亦甚に非や而して之を爲に當ても彼等は多く文字を知て意趣を知ず意趣を知りて氣骨を知らず世を導くを忘れて世に導かれ世を役するを捨てゝ世に役せらる男子此に至ては女子だも亦嘆ぜざるを得ず噫古來文學の大家と稱する者よして此小人たらざる者果して幾人かある。

固より文學は學問の花なり人世の一大快樂なり故に古來幾百千の男子が其盤根錯節の事業を避け其乾燥無味の科學を譲りて之に就きしも當然のとなり唯快樂は餘興にして本業に非ず人若閑暇を本職とし尺八を本職とし「ベース、ボール」を本職とせば世之を何とか云はん文學に於ても亦然らざるを得ず。

世或は説をなして曰く上の如きの論は大に世の文學者を輕視し文學者の責任を蔑がしろにせる者なり彼ミルトンの快筆時の多感士を泣かしめしが如きギボンの血涙忽ち羅馬の凉衰を演ぜしが如きユーゴーの隣感佛の多熱人士を狂はしめしが如きシルレルの筆頭妙に哲理を描きしが如き或は外交内政大波瀾の潮中に立てヂスレリーの腕手は飛んで政府の腐敗を訴へリツトンの巧腕は揮つて國會の汚穢を摘示したるが如き豈男子にして男子らしき文學をなせる者に非や文學の要唯夫妙境に達するにあり焉ぞ其間に男女二性の小界域を隔てんやと然り實に然り吾人此に至りて喝聲大呼せざるべからざる者あり曰く文學は利器なり凡庸の輩妄に手を觸るべからずと蓋し今

列擧せる所の諸文豪の如き中には吾人が純正意義外の文學者あるも又固く大丈夫の本色に非る者あるも今之に數歩を讓り數問を與へて其云ふ所眞によしとなさん而して能く思へ如此の文豪は唯是千万人中の一二人に非ずや其妙を得るに至りては殆ど二性の界域より脱出して心正に神に迫れる者なるのみ見よ滔々たる天下此眞文學の妙域に達したる者果して幾人かあるや其千中の九百九十九迄は皆是亭主の家政となり書生の飯焚となり又文弱的となり女子的となり多涙多情的となれる者に非ずや推究し來れば吾人の咎むる所は彼の眞傑諸文豪に非ずして此書虎類猫的諸子にあり其女子の天職ありと云ふも多く亦此常凡通庸の文學に就く若夫彼の眞妙界裡の文學は豈男女如きの小間隔を論ずる者ならんや。

嗚呼文學は利器なり文學は男子の天職に非す之に入るは易く其眞境に達するや甚だ難し故に男子往々之に入りて殆ど多く其途を誤まり爲に其金たり玉たる男子の眞粹を失ふ男子已に此の如くなれば世寧ろ文學なきに若かず天職は必ず天職あり長所は必ず長所なり大丈夫妄に其眞職を忘れて異途の彷徨兒となると勿れ男子たる者豈夫此の如き者ならんや。

顧みるに今や我國の潮流は漸く文學流行(唯表面のみなれど)の時代となり來れり小雜誌小小說日々其數を增し小詩人小歌人小小說家月々繁殖し來り滔々たる天下殆ど文學に醉へるが如し而して其文學者を以て自ら任ずる者を見るに二三を除くの外悉く是れ堂々たる男子なり特に法律を學び未來の政治家を以て自任すべき者却て之多きが如きは果して是何の現象ぞ或人解して曰く時勢は人を生む今日大平の時勢は能く此幾多の文學男子を生めりと嗚呼是果して眞に然るか明治二十三年正に來り政治社會益忙はしく教育と云ひ宗教と云ひ商業と云ひ凡て益々多事を極め國家の前途漸く多難ならんとす將に大洪水あらんとす將に震天動地の事起らんとす嗚呼是果して太平の時勢なるか嗚呼是果して男子が女子の天職に代るべき時なるか嗚呼是果して通庸青年が利器を半用して前路を誤まるべき時なるか聞く佐久間象山嘗て谷鉄臣氏を見て深く其詩文を學ぶを痛諫せりと吾人象山に非るも豈亦此一唱なきを得んや。

撫象子曰く、此論文學を輕んずるに似て輕んずるに非ず、故に女子を細視するに似て亦細視するに非ず、鬱勃たる快豪の憤慨自から文外に存す、同胞の姉妹希くは冷遇せらるとする勿れ。

汝ち大ならんとを欲するか、然らば先づ小事に忠なれ、汝ち雄壯高大の建築を爲さんとするか、然らば先づ謙遜の基礎を置べし、汝ちが建築彌よ高からば其基礎彌よ深からざる可らず、程正の謙遜は美の冠なり(セント、アワゴステン)。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

○ペルッ氏女子敎育上の弊害（下）　撫泉子

七　十四乃至十八才の女子に在ては一日五時間即ち學校に於て三時間家に在りて二時間位ひ勉強するを至當とす（此時間割は學科及敎授方の如何んによりて長短することを要す、然れども學校にて三時間敎へらるゝの準備に對し只だ二時間の下讀みにて十分なる如き敎授方なりとせば一日三時間の授業は未だ決して多しと爲す可らず、必竟如此き事は漠然として只だ數を以て言ふべきものに非ず、數學の一時間と習字の一時間とは腦力を要するに於て莫大の相違あるに非ずや、日本諸學校中尤も衛生に注意すべく且つ尤も注意し得べき學校は帝國大學の醫學部に非ずや然るに其の授業時間は殆んど八時間乃至十時間に渉り只だ十五分間内外を以て晝飯を立食せしむと云へり、然れども之れ必らずしも大不衛生の事にあらずと見做すに似たり、故に總じて如此き事は只だ外面の數を以て論ず可きにあらず）。

八　哲學、天文學、代數、幾何の諸學科は廢止すべきものなり、生理總論及び化學の一般は敎授するを望む（高等の女學には無論此等を敎ゆることを要す、中等の女學に於ても代數幾何の大畧を敎ゆるは反つて益あるべし、哲學天文學も其梗概を示すと益あきに非ず）。

九　躰育は專らに奬勵すべし運動は步行なり舞踏なり何れにても宜し又家政學の實地を習はしめて傍ら運動を兼ねしむるを宜しとす家内に於ける運動即ち働き仕事は日本に於ては女子に適するものあるに多くは下女に命じて之を爲さしめ自ら働らくもの少し歐羅巴中等社會の婦人は日本の婦人よりも働らくこと多し（是れ亦た同説なり、但し女子躰育の奬勵に大妨害を與ふるものは從來のお姫樣主義束縛手段なり、女子にも其天然の欲するほどに自由活潑に運動せしむることを許さずば其身躰自づからに壯健となるものに非ず）。

十　經驗ある日本の老成人たるものの敎育上の意見を述べざる可らず（是れ亦可也、然れども女子敎育は二三年來に初めて起りしもののゆへ老成人と云へども未だ經驗する所あらず、喩へば舊幕の遺臣に國會の議事法を相談する如く、たとひ老成人と云へども未經驗の人には餘り新事物を相談せざるを可とす、何んとなれば他の事に老成ある人と云へども其未經驗の事に對しては即はち未だ老成にてあらざるが故也）。

十一　日本の國勢、情實、生活の狀態等總べて國の模樣を

能く知る所ろの西洋人にあらざれば敎育上の商議者となすヿ能はず(尤の儀にして至極同意する所ろ也)。要するに敎育は人の性能を開發するにあり、女子の敎育は即はち女子天然の性能を開發するヿを主本と爲さゞる可らず、而して女子天然の性能の果して何如なるものなりやは從來たゞ之を壓制束縛したるの景勢の下に認知し得べきにあらず試みに先づ之を自由にし其の自づからに伸ぶる所ろを考察せざる可らず、總じて敎育は自由を要す今の女子敎育は特に自由を要するは即はち之が爲め也、此時に當り只管らに從來の習慣を墨守し又は男子の好尙を專一として女子を敎育せば是れ他人の爲に女子を敎育する也女子の爲に女子敎育を施すに非ざる也、目下女子敎育を論ずるもの少なからずと云へども先づ此の根底の覺悟に於て誤まるもの往々にして之れあり歎ぜざるを得ず、余が輩ら何んぞ女子敎育の事を知るものならんや只だ其天然の性能に隨ひ自然の啓示する所ろを遵奉し謹んで自由の敎育を施さんヿを欲するに在るのみ、語に云く無學者の誇りは學者の誇りよりも甚しと、余が輩ら若し誇る所ろありとせば是れ自然(ネーチウア)の敎示を奉ずるヿを誇るあるのみ。

○琉球淨瑠璃

碓氷山人

琉球語と日本語は甚た似寄りたる者多し故に本書の如く我國の文字にて書けば大抵解し得べし加ふるに本文を譯し日本文にて別に記したれば一通り其意を酌むは左程六ヶしくもあらず然れど原文は玉の如きも譯文は石の如くなる諺琉球人には或は面白き淨瑠璃ならんも譯文にて讀む時はさながら砂を嚙むが如し何處に妙味あるや更に解する能はず同じ淨瑠理なれども近松等の院本は其面白味之に勝る事數十等なり松山いろは君は親しく琉球語を學ばれ本書を譯解せられしと云へば原文の意はよく譯出せられしなる可し如何樣美妙君の序にもある通り時節柄珍しき著述には相違なし然れど如何程珍らしいとて讀者に快樂を與へず世人に益する所なくば無用の者となる可し余は此書を見て格別讀者に快樂を與へ裨益する處あるものとも思はず只今後我國に於ても戯曲的文學が益盛なるべきを信じ之を攻究する者の參考ともならば多少我國の文學に裨益する處ある可し其他に於ては琉球語と日本語との關係若くは相違を見んとし若しくは琉球の風俗の幾分を察せんとする者に便益を與ふるに止らん。

○つぼみ

雲の舍主人

先に大坂梅花女學校より梅花余香と云へる雜誌を發兌せられたりき、爾後梅花余香は廢刊して關西の四學校聯合して一の雜誌を發兌する由遙に聞きぬ如何に立派なるものが出るならんかと鶴首して待ち居たり數日前始めて一讀するを得たり望む所多ければ失望する所多しとか余は女手の文章は果して斯の如く六かしくあるべきものなるや否やを知らず若女子の特質は優婉美麗なる者なりとせば文章も今少し何とか面白くなしたきものなり。

(94)○万國娼妓沿革

輿論社發兌

米國人サンガー氏の著にして土屋柳平氏の抄譯たり、原書は六百七十葉の大本なるを譯して二百三十葉に約めたるを以て固より畧したる所ろ頗ぶる多し、特にスペイン、ホルトカル、ス井ツツルランド其他の九ケ國の記事を脱し、譯文も誤まれる所ろ少なしとせず、左れど原本は有名の調査報告にして廢娼問題に關し裨益する所多きものなれば、此抄譯の如き目下の大議論に對し甚はだ參考の料となるべし。

雜録

○特に當代の文學者に望む　桐郷居士

當代我邦の文學者に吾儕が望む所ろ頗る多し、幾百年來亂れ來りたる我邦の言語文章を統御するの任も委せざるを得ず、此末如何あるべきと思はるゝ韻文幷に理想小説を研究するの任も亦委せざるを得ず、左れども特に望むべきものは此に在らず、蓋し吾儕は文學者の勢力が一紙一筆より生じ來りて人心を支配すると頗る大なるを知るを以て、其人心を支配すること的當正義の手段に依てされんとを望まざるを得ず、夫れ「フィッツブ、オヴ、ポカノケット」が殘忍なる白人の奴隷を抉り「クリスマス、カロル」が能く幾多の守錢奴を刺盪し得たる者筆端の伎倆素より與て力ありしなるべしと雖も、アー、ヴィンクの愛、チッケンスの德あるに非んば焉んぞ斯の如きを得んや、重野安繹氏にして若し虚言を常とするの人ならしめば「兒島高德なし」と云ふとも何人も信せざるべし嵯峨の舍氏にして若し不德の人にてありたらんには「くされ玉子」は何人も念頭に介せざりしなるべし、左れば人の感情を支配せんとするものは詩家にまれ小説家にまれ先づ己れの德性を涵養せざるべからず、何となれば著書に對する讀者の連感は常に其著者の素行に及ぼせばなり、ベーコンの論集、スウィフトの小説、吾儕は之を賞せざるに非ずと雖も彼れの兇惡、彼れの偏僻を思ひ起せば其感動力を減ずると決して少なきに非す英國文學者の中、敢て極惡と云ふべからざるも德操の甚だ軟弱なるもの頗る多しドライデンの如きスチールの如き、ホッブスの如き則ち然り、我邦幸に未だ此等の人あるを聞かずと雖も倩ら〱今日人心の傾向を察するに往々文學者（特に小說家）を目して道樂息子の末路と賤しむもの〻如し、此時に當りて、特に愼むべきものは彼等の素行純正ならざるべからざるに在るなり。

○離婚の可否、グラッドストンの說

此頃ろ、北米評論雜誌に於て「離婚」の可否を世上に質問し、最も著名なる政治家、學者、宗教家、不信徒等より答論を需めたり。其問案四つ、左の如し、

一　離婚を行ふべきの理由あるとを信ずる乎。
二　離婚后の人再婚するとを許すべき乎。
三　家族の幸福に關はる離婚の結果如何。
四　若し離婚を全く禁止するとあらんには、社會上の道德は之が爲に上進すべき乎。

此問に對し、カーヂナル、ギッボンは舊敎徒を代表し、ヘンレー、ポッターは監督敎派を代表し、判事ブラッドレーは高等法院を代表し、議官ドルフ氏は上院を代表し、インガルソールは無神論者を代表して各自其考案を述べたるが、英國前主相グラッドストン氏は英國政事家を代表して之に答へたるの要領左の如し、

一　離婚と云ふべき名目の下に三の意義あり、別居すると一也、良人たるものが氣儘に其妻を去り妻は之が爲に去らるゝと即ち壓制上の離婚たると二也、相應の事情あり公然離るゝと三也、然るに聖經コリント前書七章十節、われ婚姻せし者に命ず妻は夫に別るゝ勿れ斯く命ずるは我に非ず即ち主あり……夫も亦妻を去る可らずとあるを本主とす、品德弱くして然るを得ざるものは之に反くなり、正當に許すべき離婚なるもの決してある可きにあらず。

二　決して再婚を許さず、婚姻は一生涯の契約にて生命の畢るときに初めて畢るべきものなり、特にクリスチアンの婚姻は神前に於ての盟約の如し暴りに破るべきに非ず、此盟約を破ることを公許するが如き權力は決して敎會に有ることなし、法律は結婚を證するの權ありと云へども其一度び結成したるものを打消すの權力あることなし、聖經を當然に解釋すれば聖經は嚴しく再婚を禁ずるなり。

三　夫婦は神の合せ玉ふものにして結合したる新らしき而も獨立したる義務之が爲に生じ之より多くの益を生ず、然るに離婚は之を破り家族中の結合を散らす。

四　此問に對しては余れ十分に答ふると能はず、たゞ余が看察したる所ろ及び經驗したる所ろを以て答へとなさん、余は六十年間英國の中心にあり、此間だ年に二人程の割りにて非常の事情と困難とを負ひつゝ離婚を申出たるものあり議院も重き不便利を之に蒙らせつゝ漸やく認許したる程にて社會全般には決して影響する所ろあらざりしに、一八五七年に離婚律初めて出來せしより、上流社會に於ける夫婦の道德大に廢れたり、之れ万人の目擊實認する所ろならん。

之れグラッドストン氏答論の大畧なり、氏は其論中に左の如き句を辨じ出したり、

社會全躰の强固健全は一個躰の强健なるに基づく、家族は即はち此の一個躰にして而して家族の要樞は婚姻の制度何如んによりて動く、故に婚姻の制度整ひ其習慣正しきときは社會之が爲に健全なり、苟くも然らず此制度破れて夫婦

婚姻の關係不正なるときは其國民は決して人類當に到着すべきの運命に到着すると能はず、之れ身中に虫あるなり何の日か健全壯快ならんと。

ヨハチと云ふ僕旦那の若様に湯をつかわせるさかの若様は湯より出て母の所へ走り來り、おつかさん私の頭は大きくなつたでしよう母親なぜだい、でもヨハチが湯で洗濯を施したから頭が脹れるだらうと思つて。

○和歌よみ方（下）

鈴木弘恭

古へは題を設けて歌をよむ事はまれにて四季のけしきを見ても何にても目に觸れ耳に聞き心に感じたることを口にいひ出れば即ち歌となり候ことなれども今は御稽古になさるにはやはり題を設けて御詠み成さる方がよろしく候題は何にてもよろし梅花にても鶯にても菫にても月また紅葉にても雪にても隨意によみてよろしく候へども春よむ時は春の季の題夏は夏の季の題にて詠み玉ふべし然して一首のうちに同じ詞が二ケ所に出るはあしく候假令ば上の句に梅の花とありて下の句にもまた梅とか花とかあるの類又上の句に鶯とありて下にも鶯とかうぐひすの聲とかあるの類なり然れども上手になりてよく詠みなせば同じ詞が上下にありても苦しからぬ例に御坐候たとへば、

なにはづにさくやこの花ふゆごもり
いまははるべとさくやこの花

などの類なり此の歌上下にさくやこの花といふ詞ありしかしながら初學のうちは穩によむべき事に候。さて人々が詠歌をむづかしきやうに思ふのは語格の事辭と申ものゝ用ゐ方が少しむづかしきやうに見ゆる故なり是またさほどむづかしきものには御坐なく候文部省板の語彙別記一冊本居宣長翁の詞乃玉乃緒七冊本居春庭翁の詞乃八衢二冊拙著の詞學捷徑二冊詞乃栞打聽一冊などを御熟考なさるべく候さて我が日本固有の語格と申ものは尤も規則たゞしく出來て居り候ゆゑ少し呑込み候へば至りておぼえ易きものに御坐候。

歌の書類も御尋ねに付いさゝか申上候初學には古今集と申歌集が第一によろしく候是れに後撰集と拾遺集といふを加へて三代集と申なりこれは一讀なされて然るべくと存候又此の三代集に後拾遺集金葉集詞花集千載集新古今集といふ五部を加へて八代集と申候なり是等は漸々には必ず一讀すべき歌集に御坐候此外にも十分に見れば萬葉集廿一代集を一閱するにしくは無く候へどもなかなか大部に候間まづ八代集位にてまに合せてもよろしく候又百人首の歌などはわづかに百首ばかりに

一四

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

御坐候間必ず諳記してをり〳〵味はひて見玉ふべし然しながら詠歌はたゞ詠捨によむばかりにては何程よみても上手には成り難く候然るべき師を求めて口授を受け添削を乞ふ時は獨學にて三年學ぶと師に就て一年學ぶと比較すれば一年の方が遙に優り申べく候。

右は御尋に任せて概略申上候へ共本年より女學雜誌社にて毎月發兌する通信女學と申ものに愚説の作文詠歌の事を委く申述置候間御序に御參考可被成候先は御答まで匆々申上候也。

娘が新ざんの女中に　御前着物を乾す時に成り丈きれいなものを隣りに見えるようにおしよ、洗ひ張りをしたものだなどゝ人が氣のつかないように氣を附ておくれ

○本邦男女婚姻の年齡

昨年九月十七日、醫科大學の教授三宅秀、大澤謙二、緒方正規、三浦守治、濱田玄達、片山國嘉の諸氏、本邦男女婚姻年齡取調委員の命を蒙むり、同九月十七日に至り報告書を帝國大學總長の許迄で差出されたるよしにて、其文醫學會雜誌第一號に出でたり、今ま普通衞生雜誌に抄錄したるを左に轉載し其一斑を示す、

我國の男子及女子婚姻をなして妊娠するも其父母の健康を害せず、又其子の健康をも害せざる年齡は大凡幾歳許をもつて其最早限となすや。

此問に答ふるには、まづ女と男とに別けて、いひます。(天)女子の婚姻年齡の最早限を定めんには、まづその生殖機能發動の時期と產婦實驗との二件を詳く知らねばならず。しかるに產婦實驗は材料に乏くして答辨することが出來ぬから、たゞ生殖機能發動の時期と身體發育の程度とに依て答案を立ればならず。

生殖機能發動の時期は即ち月經始めて來るの時で、醫科大學助手榊順次郞氏が千人の女子に就て調べたる所によれば本邦女子月經の初發平均年齡は十四歲八ケ月であります、又同教授濱田玄達氏が病床日誌より撰出して調べたる千〇十五人の女子の平均年齡もまた十四歲八ケ月であります。

此年齡は西洋の女子に於ける月經初發年齡(十五年)と大差はありません。

身體發育の程度については三輪德寬氏及高等師範學校女子部の調査により、女子十六歲より十七歲の間大凡滿十八歲をもつて身長の增加殆ど停止するの時期と看做して大過はありますまい。

右の理由にて、本邦女子婚姻年齡最早限は十四年八ケ月と滿十七歲との間であります。

(地)男子に於ける生殖機能發動期は女子のごとく較著でありませんが、西洋學者の說によりてまづ通常女子より較々晩るゝものとして、大凡十六才より十八歲の間にあるものと假定しても不可はありません。

身體發育の程度に就ては、古川榮氏調、明治生命保險會社調、大學生に就ての調、三輪德寬氏調等によれば男子身長の增加は二十二歲に至りて全く停止するものであります。右の理由にて、本邦男子婚姻年齡最早限は大凡十六歲と十八歲との間であります。

右は醫學上確實であると看做すべき材料から立案したものでありますが、さて明治十九年十二月三十一日調查帝國民籍戶口表を調べて見ますと、實際男子は十七歲以上、女子は十五歲にて婚姻するものが多であります。

故に男女婚姻年齡最早限は、

男子　滿十七歲

女子　滿十五歲

と定むるが、適當であります。

但し男女の婚姻するに先づ身體及精神の充分なる發育を要するものでありますから、夫婦及生產せる子女の健康保全を望むには女子二十歲以上男子二十五歲以上を以て結婚の最適齡と致します。

○上州記行（日記抜がき）　上　雲峯子

十一日　今日は思ふ友上野によかりこさんとて朝まだき都の宿舍を立ちて滊車に乘る、一聲の滊笛に一筋の烟を殘して都をばなれぬ、少し行く程廣やかなる原に出でつ滊車の窓より遙に西の方を打眺むれば波の如く打連なる山々は秩父なる可しまだ消えのこる去年の雪、さえて見ゆ、

さやかにもちゝぶの山に雪見えて
　滊車の内寒しむさしのゝ原

且詠み且眺めつゝ行く、何時か滊車は上野の堺に入りぬ都の方は何處なるらん抔と思ふ友語るうち

こしかたなかへりみすれば家もなし
　霞の奥やみやこなるらん

何時しか話もたえ見るともなく見まはせば雪は寒しこしの白山

北山の霞の上に見ゆるかな
　こしの高れにつもる白雪

眼をめぐらして榛名山となん云へる山を見れば中腹に棚引く白雲、見る〳〵すがたはかはり行く

うき雲のうき世と知ればふる鄕に
　殘れる老のなつかしき哉

いる矢なす滊車の速さはやくも高崎となん呼聲すめり車を下り停車場を立出て四方を望一望すれば胸に浮ぶ千々の思ひ、筆にも紙にも盡すべくもあらず我故里の山もむかひに見ゆ、

さわらびを折しむかしも忍はれて
　こひしくなりぬふる里の山

その日夕刻に高崎を發し一里許り離る倉賀野となん云へる處に向ふて車を走らす先刻雪ふり出てゝふく風もいと寒し

ふく風に雪もまじりて寒きかな
　日はくれかゝるくらがのゝ里

其日は倉賀野に泊る、

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

教師が生徒に向ひジャメ﨑は何處デヌカ？　生徒　分りません
教師　ソンナラコーヒーは何處からくるか知りませんか？　知て居りますといつも隣りから借て來ます。

○早起の事に就て　向白生

早起の善き事あるは申すまでもなし生は四年前來或縣立學校の舍監を爲して夜る三時頃一度宛部屋を見廻り蒲團から脫け出でたる者抔を直し風引かぬ樣注意したり始めは何分思ふ時に目が醒め兼ねしも一年經てからは習慣となりて何の苦もなく今にては如何程夜深しするも三時か三時貳十分には必ず醒むるなり此時怠りて又眠むれば夫れまでなれど生は妙に直ぐ起き出でざれば下腹に痛を覺ゆる故毎朝早く起きて毎日快く過ごせり是を行ふには左の條々を守るべし、

一　蓐に就く時必ず何時に起き出でんと堅く心に誓ふ事、
二　あまり飽かずあまり饑へざる事、
三　枕邊に何物も置かざる事、
四　醒めたらば直に起き出づる事、

第一は尤も必要あり睡眠と醒覺は不隨意なれども心に堅く誓へばあまり間違なき者にて終には少しも差はぬ樣なるべし。

第二はあまり飽きあまり饑ゆれば時によりてあまり早く睡りてあまり早く醒むる事あり又時によりてあまり遲く睡りてあまり遲く醒むる事あり。

第三は己が心次第にてせずともよろし然し折角覺めても枕邊に書物でもある時は蒲團の内にて見る事あり甚だよろしからず。

第四は直に起き出でざれば又眠る恐あり。

右之通り引續いて四五ヶ月務め行へば遂に自然の德となるべし其後は此規則も用無きなり、此に就て大に助を得たる生の一奇癖は何物にても正しく置く事是なりき生は幼少より書物にても机にても本箱にても斜にするが大嫌ひ机と本箱は疊の目通りに置き書物抔は本箱或は机の端と平行に正しく置かざれば氣が濟まぬ性なりし其が長じて蓐に就く時は何物も其の所々へ直せし故覺むれば書物や雜誌や新聞が早く起き出で讀み賜へと余を促せし心地するなり。

○若殿原に物申さん

ゆかり戯草

戰國亂離の文學社會に飛び込み賜ふ若殿輩に申す可き事の候各々一方の旗頭あつぱれの御働きもの〻具のきらびやかなるに武者ぶりも一きは目立て見させ賜ふが、御顏せの青み渡りて弓取り賜ふ御身の昨日には似ずわなゝきておはすも如何にゝ帷幕のうちに汗押ぬぐひ兵糧召し賜ふ方もあり、心のみはやれど馬の足掻き自由ならず氣をあせり賜ふ御方も見候軍慮に暇なくて刀の鋭あじ未だ試しもし賜はず、痛手に弱りてうごめきながらもなほ進まんと勵み賜もいさましゝ、隙間もなく飛び來る矢先受け損じ賜ふあれば、見事に斫拂ふ方もあり太鼓打鳴らして遙か彼方に戰を挑む猛者あれば軍扇取て逃ぐる敵をさし招き賜ふ大將あり、矢叫びの聲、打もの〻響いとすごし、されどいづ方を見參らせ候ても疲れて御はす樣の見ゆるぞ心得ぬ、レッシング、ゲーテー何のそのミルトン、アッヂソン、物の數かは、スカット、ザカレー、西鶴、馬琴、敵手に足らぬものよとの御勢、さても勇ましき御事よさりながら御手の内に兎角先輩の亞流を酌の兵法を事新しく敷き賜ひ内兜を見すかされ賜も心得ね、相打相鬪ぐ今の文學界中原の鹿はたれの手に落つ可きか、戰の果は如何に相成り候か、行先き知らず向見ずの猪武者が働きはゆかり感心仕らず、戰場の樣御覽ぜよ、心を込めし著書は人の笑ひを蒙り、浮きたる筆のほめらる〻も多し、青と云ふ心も知らで赤なりとてこれを讃へ、僅かの事を意の深きように思われ、深き意味を輕々しく看過さる〻も口惜しゝ、若殿輩に物申さん、名をのみ得んとて勇み賜ひぞ、亂世に割據の英雄いと多しさりながら諸侯を統御するの英傑少なし蘇秦の如き人多きも亂離を定むる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

張儀は稀れなり、文學界の太平は若殿輩が騷々しく馬逐ひ歩くその内はとても得がたき事なるべし、ゆかりは靑み渡りし御顔のます〳〵靑からんを願ふなり、痛手によわる殿原がいよ〳〵多きを希へり、六國倒れて秦起れり、活氣にはやる人靜まりて始めて眞の文學起らん、高き鼻のいつかは折るゝ時あらんに、早く來れよその折るゝ時。

生物家グラント、アルレン氏曰く、何の國にても目下の人數と同じ人數たらしめんとするは、婚姻したる婦人一人に付四人宛の兒を産むことを要すと、之四人にて后ち二夫婦となり一夫婦死すとも、一夫婦分は殘るべしとの概算に由るり。

○馬の爲め道を敷く

英國のロンドンブリッヂに近きサマスよりの街道は全て嶮はしき道路あるが重荷を負ふ處の馬があへぎ〳〵此處を通行する時いつも從者を携へて其馬の前に小砂利を敷き歩行の便をたすくる一貴孃ありて數年間全一の働きをなせり而してロンドン近傍の馬の歩行を助けんために砂石を敷き巨額の金圓を費せり其人の名をリセタ、レストと呼べり至て風琴の巧手にして四十三年間アルハロー教會の風琴彈手たり。銀座街頭累骨高き馬匹に鞭て營業するの殘虐なる輩多く今我國に於て愛を禽獸に及ぼすの淑女無きか支那太古既に德を禽獸に及ぼせし聖人あり此にまたリセタ、レスト其人あり。

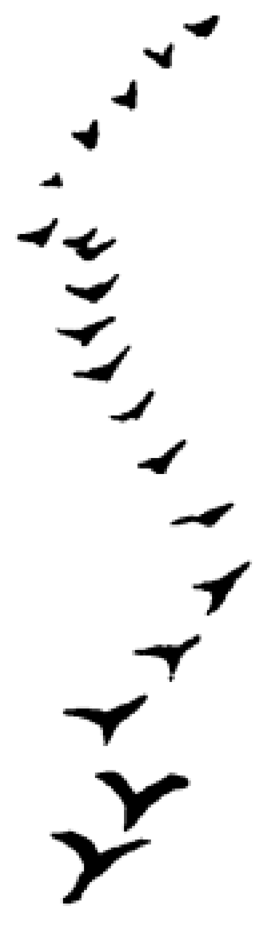
○腦の養料

すべての人が腦のために燐素を含蓄する玉子肉類其他蠣杯の如き物を食するを可とす然るに學術上より論及する時は完全せる事實とは云ひ難しと云へども腦のために十分なる養料なくば如何にして完美せる思想力を發生し得べき、食物によりて盡く其養料を得べきに非ずとせば何によりて腦力を養ひ得べきぞ、リービッグ氏曰へり三人の人ありて第一の人は肉と麪包を食し第二の人は牛酪と鹽魚を啗み第三の人は野菜を食ふと假定せよ此等の人が同一の疾病に罹るも其中に幾分かの區別あるは疑ふべからざるの事實あり故に腦に於けるも不同の食物を取るの人は夫々の結果を引起すべし或る大學に於て一匹の熊を養へり最初は之れを養ふに麪包を以てせるが其性質の大に柔順なるを見たり其后四五日を經て肉を以て之れを養ひしが其性忽ち變じて猛惡となれりとぞ蓋しこれ等の事實は食物に、幾分かの關係なしとは云ひ難し、野菜を常食とする人類と肉食を常にする人種とは其思考の上に大なる變化あるは爭ふべからざるの事實なり然れども何によりて然るかは

一八

學理上よりこれを論じ難し、腦力を養ふに他の方法は多かるべしと雖も最も食物の如何に源因すると多し。

十才計りの兄、弟に云ふ、ナンダさ子ー、男より女の方が長生するさ子ー、ダカラあなたや私しより梅さんの方が長く生きるのよ。七つ計りの弟、デモ兄さん内のお祖母さんは去年死んで僕等やお父さんはまだ丈夫だし、お隣りのお祖母さんも此間死んだが叔父さんは丈夫じあやないか。兄、ソウサ子ー、するさ此近所では男の方が長生なんだよ。



きよめぬ庭

其三

酒落齋主人

○従順なる夫（上）

「物の名も所によりて變るらし難波の蘆ハ伊勢の濱荻」となん云ひて、古より國所によりて、物の名の變る事ども云ひ傳ふれど、國異り、所變ると雖ども、變らぬものは人の情なめれ。ことさら世の上流に尊めらるゝ人はしらず、朝には星を戴いて出、夕には月を踏んで歸る、幾許の金得んが爲に、全身殘る限なく汗して、勞に勞し足を、酒店の床几に息ひ、濁聲に訛歌唄ふを以て樂園の春の日に、百味の御食を饗る如くに思ひ、衡足して家路にたどり着く、下流の情態は、實に憐む可く、またおかしきものにぞある。

此所は佛らんす國ぱり一府の片邊りに、杉葉たてたる小店ありけり、元より座席と名付るほどのものあらざれど、八人九人の人の飲食するには、餘りあらむ。先の程より集ひ來て、各々十二分の醉を帶び、己がまに〳〵なる事共、はゞかりもなげに語り合ひ居たるが、其中の一人何事をか思ひ出しけん、ツト起ちて人々に對ひ、云ひ出しけるは。

日　ナント皆んな今夜此から家へ歸つたとして、己等の家婦、がなんと云ふだろふ、

月　なんとってベランメー、云ひ度事は勝手に云はして置くがイヽヤ、

火　それもそふだが、此所に面白い評議があるが、ドウダ皆んな同意しチヤア呉れめいカ。イヽカ、此から皆んな家へ歸つて、家婦が何とでも云たら、ドンナ無理な事でも、其云つた通りヤッテのけるのョ。若し其に盾をついて、爲なかつた奴があつたら、其奴に己等の勘定を持たす事と極やふ。それで明朝九時に再度此家へ集つて、各自に白狀する事としたら、ドウダおもしろかろふ。

と云ひ出しける議案に、滿堂七人の人、悉く同意しければ、さらばとて、己がまに〳〵、家路をさして歸りける。

茜さす豐榮登る太陽の光、まばゆくさして、近き邊の自鳴鐘は、

や九時を知らせたる頃、前の家さして寄り來りたる人々は、前夜の約を守る、一連にぞある。今はや家に入らんとして見るに、戸口の側に横たへたる、大樽中より、二本の足、長々と出しありければ、人々おどろき之を見るに、仲間の一人なる、木兵衛なりければ

一同　オイ〳〵あんだつて此んな中に臥て居るんダ

木　なんだッて聞いて呉れ、夕べ家へ歸つたところが、己の家婦めが「御前さんの樣な、醉漢は、家へなんぞ歸らなくッてもイヽ、それほどお酒が飲度ければ、樽中へでも入つて寢ておゐでと」云ひやがッたから、其の通り夕べから、此中に寢てゐたのヨ

されば なるかと、皆々うちつれ立ちて、前の席へ通り、此より、次の男すゝみ出でゝ語る。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

小說

○イナック、アードン物語　テニソン著　菜女譯

イナックはこゝで誰とも言葉をかはさず、たゞ家路を急ぎ升た、併し我家とは何れの家か、まさ敷自分の家があるのかないのか心に疑を抱きながらたゞ足に任せて歩み行升た、モウ午後にもなり升て、日が輝る事は耀てゐ升すが冷々すると、思ふ中に彼の二ツの港が瀕してゐる海から雲霧が起り立升て見る〳〵一面灰色の世界にして仕まい升た、それ故行先も左右にある野山も足元の外は少しも見えませんかつた、大方は落葉した一本の木の上に知更雀が悲しげに囀つてゐ升たが、それも霧に濡れそぼくれた枯葉の重に壓れて、鬱陶しそうな風情に見升た、霧雨はます〳〵しげくなり、暗さはます〳〵暗くなるやフト霧の掻き消した光がポット顏を出して、イナックは漸く我家近く來たと知り升た。

それから心にさま〳〵の災難を迎へつゝ足元の小石に眼をつけて盗む樣にして彼の長い通りを下へ下り、とう〳〵昔の我家へ達し升た、こゝはエニイが元自分をいとしがつて呉れて、七年の愉快な年月の間ち兩人のなかに子さへ設けた處でした併しこゝには燈も人聲もしませんで、ビショ〳〵雨のあかに賣家の札がひかつてゐ升たからイナックは死んだのかさもなければおれには死んだ同然なのだからと獨りごちつゝ又下へとさがり升た。

そこでイナックは彼の狹い波止場へ出て昔かし馴みの安宿へ行升た、この家は見た處があまり傾て虫ばんでいかにもさび

れた有様でしたからイナックはモウ明家かと思ひ升た、併し元の亭主は死んでしまつた跡に後家のミリアム、レインといふがかすかな利益をあてゝまだ店を持つてゐ升た、昔しは呑んだくれの船頭どもが寄合ふ塲處でしたが今は折ふし旅人の宿る斗りて結句靜かな家でしたからイナックは數日こゝに默つて休息してゐ升た。

然るにこゝの主はお人好の話好で、イナックを長く獨りでは置ず、側へ來てはさま〳〵世間話をする内に、昔とはいたく姿の變つたイナックを其人とは夢にもおもわず、其家の話しをすつかりして聞せ升た、それはイナックが留守にあつてから赤子の死んだと、日増に貧乏になつたと、フィリップが子供たちを學校へ入れて世話をしたと、フィリップの久しくエニイの愛を求めてゐたと、エニイがいつまでも躊躇してゐたと、とう〳〵婚姻して、フィリップの子の生れたとあとでしたが聞くイナックは顔色も變へず、身動もしませんでした側に見てゐるものがあつたら、聞てゐるものより話してゐる者の方が一心になつてゐると思ふ位でしたろう、併し一番終りに、可愛そうにイナックさんは難船に逢つて果たそうですと云升と、イナックが白髪頭を振り立て、彼の女の云つたとを心細そうに口の中で繰返し、心の中にもモウこれ迄と覺悟をきめ升た併しイナックはエニイの顔が見度てたまりませんかつた切めてあの愛苦しい顔を一眼見て、安樂に暮らしてゐると知つたらば」と始終心に惑つてゐ升て、フトある鬱陶敷霜月の夕ぐれ彼の小山に登り、腰かけて下の景色を眺め升と、幾多の感念が心に浮んで來升て、云ふに云われぬ悲しみでした、其中にフィリップの家の窓から快さそうな、燈の光がチラ〳〵と遠く迄輝き升て、イナックを我知らず其方へ足を向させ升た、これは丁度燈明臺の光に狂ひ廻つて羽ばたきしつゝ俄かに淋敷命を終る水鳥の樣な有樣でした。

さてフィリップの家は通りに竝んだ町外に有升て、後ろには野の方を向て、小さな門と塀があり、中には四角な庭と古い礫が有て、此週圍には重ね板の小道がついてゐ升た、イナックは眞中の小道は態と避て、礫の後の塀について、廻り升たがこゝから、覗き見たのはイナックの憂の如き憂を假りにも、輕重するとが出來るとせば、却つて無分別で有たのでした、棚の上には茶碗や銀のものが輝つてゐる爐には温かな火の焚てある中に愉快そうな家屬が團欒してゐ升た、昔しは嫌われ

たフィリップが今は爐の右に坐つて居て、至つて盛んで強壯らしく、今赤子を膝の上へ載せて居升た、そしてそれと同時に二度目の父に寄り添つてゐる女兒は昔しのエニイ、リイよりは丈は高くとも、矢張り母に似て器量よしの總領娘で、今指環を下げた紐を高く持擧げて赤子を遊ばして居升たが、赤子が肥つてくびれた手を出して、取ろうとしては取そこない升とみんなして笑ひ升た、面白そうに爐の左に赤子の母が度々赤子の方を見ながら自分の前に立てゐる丈高く強壯ら敷男の子を折々見ては噺をすると見え升たがそれは子供を悦ばせるものが男兒はほゝえんでゐ升た。

寄書

○水車と姦淫公許

哲夫子

書物讀むこと、誠にイヤになり、向の野邊に遊びたくなりぬ、シカシ、思へば午前の日課はまだ半分も終らず、吾私語て曰く「散歩反て勉強をたすけん」と讀みかけし書物をたゝまんとする時、目のさきにちらつきし句あり「已れの便利は、假道理の母なる……サテ、已に野邊に至れば山、清らかに川清らかに、森清らかに、谷清らかに、茅屋清らかに、牛ひく童の歌清らかに、吾心も自ら清らかになりぬ、吾思へらく「清き中に、汚れ生ぜず」、心なき杖は、吾を導きて思はず喩はしき溪流のほとりに至りぬ、たに河、岩に激して、かまびすく、水車の音亦た至てやかましく、吾がうたひし歌、吾耳に入りにくゝ思ふ程にぞ、嘆ずらく、「俗聲も時に清音を沒す……」吾岩に腰かけ、つらく水車の轉ずる樣を見るに、水を擔ふ處の板、重み加はり下底に隱くるゝと思へばしばらくして又た來て水を擔ふて回轉す、轉々、止む處を知らず」吾ひそかに思ふ「劣情亦如此、滿足を得れば、滿足にはげまされ、已にはげまさるれば又た、進て滿足を求む、轉一轉、かぎりあることなし」と、吾水車場の內部を見んことを欲し、番人について求めしに、番人心よくゆるせしかば、內に入りて種々、運轉する器械を見る、しばし番人が說明を聞き居たりしに、忽ち後より吾名を呼ぶ者あり、顧れば弟なり、弟愛らしき眼を丸くして、曰「兄上此處に居しか、夕飯なり歸り給へ」二人共に水車場を去り、谷を出で、野邊に來る、此時、弟自身のしきりに嘆息するを見て、其何故なるを問ふ、吾靜に答て云ふ「弟よ、御身彼の水車場を見よ、御身は內部に如何なる陰微の機械運轉しつゝあることを知るか、戶外よりは見へざるべし、しかし試に內屋に入りてこまかに點檢せよ、只だ一個の水車は、無數の機械を運轉しつゝあるを見ん、夫れ彼の姦淫公許は則ち一種の水車なり、見よ、此の水車即ち姦淫公許てふ惡念は自ら轉回し深く其の力を社會人心の裏面に引て幾多無數の汚穢、卑劣、不義、無操、罪惡—婦女男子の節操なき事、家內の不和なる事、男子の女子を重んぜざる事、男女間或は相互の交際の不潔なる事——凡て此等の器械を運轉しつゝあるにあらずや、人あり表面を見て裏面を見ず、有形を見て無形を見ず、彼れが遠謀と思ふは遠謀にあらずして、彼れが淺慮と呼ぶ淺慮は反て遠謀たることをさとらず、若し夫れ彼の水車運轉を止めんか隱術內裏の方の運動玆に中止せん、余は知るべきなり……」弟は聞て默然たるのみ、橋に來る、水清らかに、流靜かに、魚躍り、水鳥の遊ぶを見る、嗚呼さきの奔湍激流も遂に清平に歸せざるを得ざるなり。

○小說に付ての述懷

方內齋主人草

猥褻目を穢す作畫を見て之を畫なりと云ふべきか曰畫なり慘酷耳を蔽ふ殺傷を叙し之を小說と云ふべきか曰小說なり或る人余を難じて曰甚かな子の醜にして且つ汚なる曰余豈に文壇の惡魔ならんや釋迦の如く穢ならざるも耶蘇の如く聖ならざるも平生抱負せり一片の道德心作畫本より倣ふべし人殺本より忌むべし然れども虛心平氣之を思ひ之を感ずる彼れも此れも道德の範圍を脫すればなり若し然らずとすれば夫れ將た何を以て之を眼むべけんや醫學上生殖器の講義に入らんか知らず知らず彼の作畫に傾せるものを見るの時あるべし法學上殺人罪の辯論に移らんか勢亦彼の人殺しを聞くとあるべし然すれば作畫も時によりて畫格を失はず人殺も場所によりて語るべきなり世人親殺しを見れば憮然として跡を回すべし復讐と聞かば[illegible]然先を爭ふべし而るに均しく是れ人殺しなり此を以て是を說るに盜賊も小說の材料たるべし須山も小說家の圖畫たるべし嗚呼冬の寒きは以て夏の熱きを知るべし勇者を撰むには先づ怯者を招くべし此の爲めにこそ盜賊も小說の材料たるにあらずや人情の粹美は必ずしも忠臣孝子の門のみに在るにあらず不肖余竊かに以爲らく小說は成形の圖畫たり生動影像なりと親は子を思ひ子は親に慕ひ慈愛の雲は繚繞として南畫の霞や靄然たり之を圖にせんが畫幅を見る之を筆にせんか小

說なる山は高く翠を戴き川は深く碧を浮ぶ而して妖紅慢綠相映じて奇觀あり之を刻せんか彫像成る記して以て小說に編むべし蓋し小說の要は「プラスチック」にあるなり又「モチチン」にあるなり奥行のある靈運動のある像此れ他にあらず乃ち小說の本躰なり若し夫れ此の小說を讀んで五右衛門を敬し長右衛門を羨み又時姫を慕ふものあらば余は長大息して告る所あらんとす

其語に曰　思慮定らずんば小說を見るなかれ

○流　行　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　み　れ　子

種々樣々の流行ある中に最も甚しく盛衰あるは蓋し女子の服裝なる可し西洋諸國に於ては其弊や只に財貨を徒費するに止らずして女子の健康を害するが如き惡弊少なからず偶々父母教師等が其害を說ひて其服裝の用ゆべからざるを告くと云へども薄志弱行の貴女令孃は之を聞かず汲々屹々流行を逐ふて是日も足らざるの姿なり彼等は以爲らく若流行に從はざれば惡事なりと、此故につとめて腰を細くせんとし足を小ならしめんと望み其極遂に肉躰自然の構造を害し其發達を妨げ治すべからざるの疾病を招くに至る豈嘆ずべきの至ならずや夫れ人幼なる時は未た骨軟かきが故に容易に害を蒙るものなり故に靑春妙齡の婦女子をして之が發達を妨ぐるが如き流行を追はしめざらん爲め其父母たり敎師たるものは深く注意せざる可からずと云々と或米國人は云はれたりわらはも此事を深く感ずるものなり我國の女服の如きは西洋諸國の女服に比すれば甚た健康に害なきものなり然るに西洋文明一度渡來せしより其惡弊をも輸入し或は洋服を衣るあり靴を穿つあり腰を細くせんと欲するものあれば鼻を高くするの方法を問ふあり身丈を高くせんとし色を白くなさんと冀ふが如きに至つては實に惡弊も極れりと謂つべし人各々天然の美を有す敢て之を變裝するの必要なし否斯の如くせば却つて天眞の爛熳を害ふに至るべし日本の婦女子たる者今日に於て深く猛省する所なかるべ可からず去んぬる十日の國民新聞紙上に一面の畫あり之に題して「流風」と云ひ詩を添ふ曰く「安得二冷然如レ羽輕一。裝長綿重不レ宜レ行。流風枉擬當レ筵妓。却是堂々女學生。」と嗚呼此言を爲さしむるは何の故ぞ嗚呼誰の罪ぞ。

新島先生の世を去り給ひしをきゝて　　　　　　　　　　郷　の　山　人

大磯のあらき波風吹立て枕にかゝる小夜しくれ哉

學びの友のみな打ちはげむをみて

國のため共に誓ひてますら夫の心の劒とぎすましつゝ

開書

交詢

●大坂購讀者一人　禁酒主義の宴會を爲し玉ふには、ラムチを用ひ、音樂を奏し、淸き落語を談ぜしめ、惣べて美なる樂しみをお與へなさい、索然無味にするときはいよいよ酒の宴を慕わせるやうなものです。

●下野の一少年及愛知二三子　お二方とも神田開發社で色々出版しまする通信講義物を御覽になるが宜しひでしやう、大抵獨學が出來ます、番地は神田柳原町十四番地です。

●德島一女生　英語の文法書で早く分るのはコックス文典です丸善にあります。

●浪華KK女史　婦女鑑の外で婦人が讀で好き書物は色々ありましやうが、博愛美談(浮田和民氏譯)。聖書名婦傳。エリサベツ小傳。東洋の婦女。など皆宜しひでしやう、女學書類目錄は郵劵二錢送り玉へば差上ます。

●神戸KN生　和秘抄にむかしはをさなきものは小袖をきずたすきといふ物をきるなりとあるタスキは何如なるものかとの問釆女ウネメなど儀式に用ゐる襷タスキとは別物なり此所にむかしとある中昔之紫式部の前の頃より其後鎌倉の頃までも京都などには此風ありしにや晞花抄に今世無二存知人一頗秘事也とあるを見れば南北朝後に至りては知る人も無くなりたるとみえたり按るに小袖を着すとは並の如くきずして小袖の上に襷を着るとこある人の說に緋のれりぎぬの一巾なるを襟にかけて左右の前へ下げ左右の手の下　邊を袖をかけて結び餘りは後へ下るなりといへり宇都穗物語枕草子源氏物語などに見えたる皆少女の年二三歲より四五歲なれば七八歲以下の少女の着ることゝ見えたり必ずうるはしき事なるべし今少女の襷をきたる圖は見當らざれども大人の儀式に用ゐるもの女官裝束抄中に左の如くあり參考の爲め是を示すべし(鈴木弘恭)

●伏見子　お尋ねの小說家の雅號と俗稱の私がホンノ覺へて居る丈けをお答へ申します(濱萩英子)。編者は濱萩娘に非常のお手數を掛たとを謝します、又アナタの御宿所を序でにお知らせを仰ぎます)。

逍遙（讀賣新聞上）坪内雄藏。美妙齋主人（いらつめ、都の花、改進新聞上）山田武太郎。紅葉山人（小文學、讀賣新聞上）尾崎德太郎。二葉亭四迷（都の花）長谷川辰の助。嵯峨屋お室、北邙散士 都の花）矢崎鎭四郎。如電居士（都の花 大槻修二。香雪散人（新小說）前田健二郎。竹の舍主人、饗村（むら竹、東京朝日新聞、新小說）饗庭與三郎。三昧道人（大阪朝日新聞、新小說）宮崎璋藏。澁柿園主人（日々新聞、文明のはゝ、都の花）豐州と申します塚原靖。思軒居士（新小說、報知新聞、國民の友）森田文藏。南翠外史、香沁園主人、名太郎主人（新小說、改進新聞、（須藤光暉）日下吉南翠と稱す。探菊散人（やまと新聞、新小說、歌舞伎新報）條野傳平。流鶯散史（都の花）谷口政德。藤陰隱士（同上）藤本眞。松江釣夫（同上）高橋進郎。四貫居士、天香、柱華山人（新小說、東京朝日新聞上）小宮山桂の助。蝸牛露伴、小文學、讀賣新聞、都の花）幸田成行。此花清夫、香風園主人（東西新聞）田村岩二郎。柳塢清史（都新聞）古田貴彥。錦城（新小說）半井冽太郎。漣山人（新小說、文明のはゝ）巖谷季雄。南新二（新小說、やまと新聞）谷村要助。思案外史（小文學、日本の文華、文明のはゝ）石橋助三郎。塊堂仙史（都の花）中川孝吉。彩霞園柳香（江戸新聞）廣岡豐太郎。桃水痴人（東京朝日新聞）半井冽。三品藺溪（改進新聞）三品長三郎。柳浪子（小文學）（文明のはゝ）廣津直人。破笠居士（新小說）朝比奈知泉。忍月居士（新小說）石橋友吉。幸堂得知（新小說、江戸新聞）鈴木利兵衞。○外漁史、（讀賣新聞、柵草紙）森林太郎。落花流水（讀賣新聞）中西幹男。既溪居士（今はなし）喜多川金齊。學海（都の花）依田百川。彼亭主人、朝霞隱士（東京朝日新聞、都の花）渡邊勝。花笠文京（東西、絵入自由新聞）渡邊義方。涙香小史、小涙生、（江戸新聞、絵入自由、東西、都、櫻園）黑岩周六。虛心亭主人（國の光）岡田‥‥。櫻痴居士（今はなし）福地源一郎。府山人（同上）川上亮。一筆庵可祝（やまと新聞）富田一郎。鉄腸居士（今はなし）末廣重恭。魁當子（神戸又新々聞へ入社せり）古川精一。（以上男）。秋月女史（都の花）大島ちよ。竹柏園主人（同上）佐々木昌子。湘烟女史（同上）中島俊子。花圃女史（今はなし）田邊龍子。小金井君子（しがらみ草紙）。若松しづ子（未詳）。

通信問答

●通信女學第三卷よりは兼て日本育兒法改良の卒先者たらんとする大學院學生一學士三島通良君が得意なる育兒法を教授せらる可し。

時事

○日本婦人

日本は美術國なりと誇りて藝娼妓の繪畫を輸出す、之と均しく内地には妓樓を堂々巍々乎たらしめて出稼ぎ婦女の洋行に驚ろく、共に情理を知らざるものと云ふべし、愛國者よ何んぞ其本に反らざる。

○米人吾等が同胞姉妹を評す

一月十二日發米國桑港サンデーコロニクル新聞は、日本婦人と題し左の如く痛論したり、

日本婦人多く不德の目的を以て入港し來る、稅吏フェルプス氏の盡力により支那婦人の惡商賣は大ひに減じたりと云へども、今や亦た新現象現はれ來り近頃ろ日本婦人は不道德の目的を有して大ひに輸入し來るなり、其の來るや一船來港ごとに一人乃至十二人を船載す、然れども現今の法律によりては得て之を制止すべからず、其來るものは或は女敎師の如く女學生の如く女旅人の如く裝ほひ時には亦た下婢の如く躰して來る、今や日本婦人を滿せる曖昧なる家は官の注意する所ろとなれり願くは移住取締掛に於て近日會議に十分の取締を爲されんことを望む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嗚呼これ何等悲しきの報ぞ、遙かに語を桑港滯在の同胞兄姉及び領事足下に寄す、君等宜しく協力して如此き婦人が濫りに上陸するヿを禁止すべし、特更らに外國人の手を煩はして神洲の恥を他邦人の上に露わすべからず。

○第二のレビット夫人
アッケルマン孃來る

米國婦人禁酒會の第二世界週遊者たる、ゼッシー、エ、アッケルマン孃は、本月五日佛郵船メルボルン號にて香港より上海に着し北京を週遊して直ちに我國に向ひたる趣きなれば、即はち本日入港の船にて到着あるべき日取あり、

MISS ACHERMAN.

アッケルマン孃の略傳は本誌第百六十一號に見ゆ。

○政黨に入りがたき人種

淺草猿屋町警察署は自由黨幹事が婦人大井ゆき子の入黨を屆出たるに對し、婦女子が政黨に入るヿを聞屆けずと指令せしよし、然らば婦女子は未丁年の男子、學校の敎師及び生徒、等と均しく政黨に入るの權を奪はれたるもの也、政府が人民を取締ると抑そも如此き度迄に至るを要する乎。

○東京の監獄

監獄の改良漸やく行わると聞きつるに、報知新聞の記する所によれば、東京警視廳監獄本署刑事被告人の監房には、四疊敷の一小室中に九人乃至十人の囚あり夜間と雖ども手足を伸して寐る能わず折重なり辛ふじて横臥し居るに過ぎず且つ此室の一隅には三尺四方の板張あり其内に飲水てうず水及び大小便器を幷置するを以て毎朝顏を洗ふに當り汚水に觸るゝあり不潔言ふ可らず入浴は毎十日に一回にて浴塲の雜沓言わん方なく僅に躰を湯壺に投じ得るのみ地方の監獄に比するに却つて取扱ひ殘酷なれば囚人は夜間まゝ歎息涕泣して夜を明すと云へり。

○天上天下

我が天皇陛下は金鵄勳章を制定し將來武功あるものに賜わら

んとす、過日吾社に對する偕行社の新築落成し千百の武官勳章燦々として馬上いかめしく往來せられたるの樣によりて推察しても、軍人今后の榮華はいよ〳〵花の如くならんとす、扨て下民を見るに、米價ます〳〵騰貴し、九尺二間に住ひしものも木賃宿に填充し、木賃宿を家としたるものは乞食するに至り、府下幾万の人將に餓えんとす、天上には音樂ほがらかにして鹿鳴舘より響き、地下には妻子父母相抱きて世に生れしことを歎き居るなり。

○嗚呼ラスキン君！

美術界の天使ラスキン君に告ぐ、足下の純潔淸美なる念ひを以て觀念せば、天地間に實に人界ほど不潔なるはあるまじきなり、足下山を見水に臨み鳥に聽き虫にむせび、美感油々として天にある心地し、忽然下天を見れば貧人困し盜賊橫行し惡徒跋扈す、足下安んぞ痛むことなきを得ん、足下の僥倖之が爲に破れたり、足下遂に平念を失つて發狂すと、あゝ前日のラスキン君よ、切にラスキン君の靈魂に告ぐ、われら胸うてでも世は踊らず仁人君子は多少狂せざるを得ず、左れど世は遂に一つに定まりて大道必らず守るべし、足下希はくは少しく思ひを沈めて再たび吾黨と靜談することを爲せ。

○世界週遊兩女子

本誌第百九十五號に記したる世界を一週して競爭する兩女子の中ち、ブッスランド孃は桑港より來りて西に向ひ、ブライ孃は香港より來りて東に向ひ、何れも近日の中に米國に歸り何れか早く全世界を一週したるかを確かむることあるが、近報によればブライ孃は去廿七日に紐育に着したるべく、ブリスランド孃は廿八日あらでは着すまじと云へば、蓋し一日の早きによりブライ孃の勝とあるべし、全世界を一週したゝ十二時間の優劣によりて勝敗を決するの偉女子あり、女子あに怯ならんや。

○惡しき風

インフルエンザと云ふ流行性のかぜ襲ひ來れり、之は去年ロシアにて起りしが見ろ〳〵滿世界にひろがり、アメリカを通りて遂に神戸橫濱等まで來りたり、此は我國にても古しより度々流行せし病にて歴史上咳逆咳病風疾などゝあるが即ち之なり、漢方醫は矢張り傷寒又は感冒と稱へしものにて珍らしからず、衞生局にても臨時報告を發せし程ゆへ能々用心すべきことなり、此病は、

元因何なりや未だ分らず然し何にせよ一時に流行る也。

徵候は數日の間だ體だ疲れ眠氣催ふし又は眠りがたく頭痛などあり、然し又俄に發すると多し、發すれば寒む氣頻りにて體溫あがり脈甚しく呼吸せまり頻ひ痛く又稀れには后ろの頭が痛く、手足ふるへ、體衰ろへ、涙出で、喉鼻にカタルを起し、后ち熱ふきがる、發病の時さ、二日乃至四日又は十二三日に至り俄に發汗してなほる。

療法は風と大抵同じ、安らかに臥し淡泊の食をたべ、キニーネを內服する等なり、其他は醫者に聞くべし。

廢娼記事

●●●●●廢娼壯年義會　同會員は去十一日示威運動會を爲し市中及び吉原廓内を廻り、大門の前にて路上廢娼演説を爲し、歸途各新聞社の前に至りて廢娼万歳を唱へたり、此の日來會したるもの凡そ一百名は一々姓名を記し後日の用に供へたるが果して東西新聞にて忌しきことを數行掲載たるにより直ちに談判し同行者の悉さく潔白なることを證したるよし、後の爲に慮ばかると深しと云ふべし、且つ當今上京中の各知事を一々訪問し、鄭寧なる書状に島田植木二氏の廢娼演説及び巖本の妓樓全廢を添へて呈上し、面會を許す人には面會して温和に來訪の主旨を談じたる由。尚ほ來月第一土曜日は竹川町教會にて同會の懇會を開きいよ〳〵向後の運動法を議する由なり。

今日　午后二時より番町教會にて田村直臣、石坂龜治、古莊三郎三氏の廢娼演説あり番町婦人會の發起なり。尚ほ明后日は麴町教會に於て同樣の會あるべし。

●●●●●存娼矯風會　府下の壯士齋藤源四郎、中西三一郎の兩氏は存娼矯風會と云へるを設立せんとに盡力中のよし、娼を存して風を矯むるとは何如の事かは知られど要するに亦是れ廢娼論の影響する所ろにして今の娼妓を存しつゝ其弊害を少なふするとの主旨か、近日其發表する所ろに由りて知らん。

●●●●●三田の演説會　前月三田四國町の三田教會にて稻垣末子佐々城豊子入江錦五郎諸氏等の廢娼演説ありし時非常の妨害を加へたるものありし由あるが、去十五日同じく稻垣末子、河原又次郎、平岩恒保等諸氏の演説ありしときも聽衆中に慶應義塾の書生ありて騷ぎ特に會堂前より石を投し暴言したるにより廢娼壯年義會の會員三四名表に飛出で逆まく中にて路上演説を爲しけるに皆な靜まりて謹聽せり、其中ち巡査來りて取締るとき失禮したりとて三名拘引せられたり、よりて壯年義會の人々は近日同所にて更に大演説を催うすと云ふ。

●●●●●娼妓樓主を訴ふ　府下内藤新宿二丁目の貸坐敷植田屋出稼娼妓田毎は樓主が其身を裸体にして毆打せしにより去十四日檢事局に訴へ出で廢業の事に付き樓主を告訴したり。

●●●●●教員辭職　神戸某小學校の教師は廢娼熱心の人なるが同校の生徒中に妓樓より來る者ある由にて妓樓主人が大に不平を鳴らし遂に彼の教師辭職するに至れる由、德智を教ゆる學校も妓樓の利益の爲に動かさるゝとあり抑々學校は何を教ゆるの場なりや。

●●●●●名古屋　同地廢娼運動の事は前號にも記載したるが、此變更に同地より左の通信あり

鈴木かい、百野ひて、小室かつ、清水よね、吉川さは、服部くに等の數婦人は去る七日有志姉妹一百五十七名の代表者として一箱の廢娼建議書を目下開會中の通常縣會へ差し出し且つ議長森東一郎氏に面接して親しく廢娼の緊要なる所以を陳述し併せて議員八十餘名の方々へ島田植木兩氏の廢娼演説一部づゝの贈與方を依賴して退かれしに森氏も只管姉妹方の志を感賞せられたりと云ふ。

●●●●●越后高田青年會　去る一日大會を開き清水深三氏の發議により今后廢娼の爲に運動することを同會の事業となすべき旨滿場一致にて可決したり。

●●●●●山形縣鶴岡　曩きに庄内學事會の勸告あり今又玆に一致講義所内なる婦人義捐會は去る十一日憲法紀念の日をトし廢娼演説會を催されしに頗ぶる盛會なりし聽衆無慮一千餘人にて演者は同會員の進藤孝子宮坂福子加藤菊代子等妙齢の處女及び客員として倉井恕氏出席し一時間餘の辨論を試みられしに滿場傾聽の体を現したり散會の際會員の婦人は四方八方より廢娼同盟に贊成を乞ふの文を手づから聽衆に渡されたれば即座に同盟を申込みたるもの實に十七名なりしと云へり。

附言演説會雜物其他の費用は會員各自に靴下手袋等を拵へ其賃錢にて辨じ眞に婦人の手になりたるものなりと。

●●●●●山梨縣甲府　同地にても廢娼の建議を縣會に出し且つ廢娼會を設けたり、精くは別項通信に見ゆ。

通信

○山梨縣下甲府通信（二月十二日發）。

山邊ひさ　報

○山梨英和女學校　昨年五月の創立にして當地發起人は信者もあれども多くは基督教贊成者なりこれと外國傳道會社との協立なれば双方共に平等の權理あり他の校とは少しく組織を異にし居れば外人のみ威を振ふ憂もなし若し万一意見を異にするの日には當校は發起人の手に歸し外人はたゞ退くと申約のよし當地身延山の宗徒僧徒多きが故に創立の際は非常の妨害を蒙り殊に彼の東京に於て高等女學校の評判高かりし折なりしかば從て大影響を及ぼし爲めに入學生も少なく目下僅かに十三名にて御坐候尤も當校の評判は甚宜しきに付來四月には尋常小學を卒業せしもの多く入學致す事と存候生徒は何れも當縣各地豪家の娘共のみにて皆々寄宿致し居り氣風もよく順良なれば殆ど一家族の如き有樣にて候校舍は未だ新築せず日本の家を數軒連らね修繕してまに合せたる物なれども案外に都合よく行き屆き居り申候殊に教師ミス、ヴイントミユート姉は珍らしく日本の事情に通ぜる人にて實に評判宜しく外にミス、プレストン姉傳道の手傳ひ居られ申候。

○甲府の教會はメソヂストの會堂一ヶ所にて會員老幼とも百七十名斗り教師山中笑氏と山崎久吉、布施某二名の傳道師あり其他各七ヶ所程に傳道師參られ布教に盡力致し居られ候去月三十日當地公園地内にて縣下の基督教會大親睦會あり各地より來會せるもの二百四十名感話勸め等あり各主の御恩の深きに感じ歡を盡して別れ申候。

○廢娼は當縣會目下開設中に付き當校主新海榮太郎の發起にて廢娼の建議を爲さんと計畫致され贊成者を求められしに何分匆卒日子の少きため連印せる者百八十名となりし頃最早差し出さねばならぬ事となり去る八日差出されたり併し本年は議事に附せずして却下すると議長の話されたりとか、本年は叶はず次回には是非贊成さんと熱心致して居られ候且つ此度山梨廢娼義會なるものを創立致し同志五名を募り以て運動する事に相成り何人にても贊成なるものは會員となるを得候幹事五名を置かれ新海榮太郎、内藤大三郎氏等常撰し小妹も其一人に加へられ候此五名に萬事相談連帶責擔する事に御坐候近々に廢娼大演説會を開く積りに御坐候去る九日夜は會堂に於て同會の發會あり新海氏山中氏演せられ候聽者溢るゝ斗りにて無事にありし遊廓の中央に在る會堂にて此事を演したる事なれば妓樓の主人達も聞き居りしなれども一言の否を發するものなかりし目下娼妓百十五名妓樓二十軒あるなり廢娼に付ては山梨日々新聞即野口氏の新聞も贊成を表せられ候

會の爲めに盡力せらる尙山梨青年會の人々も賛成なり山梨基督教青年會も若より
なりなかく\勢ひよく御座候妹は力なしと雖も我々同胞姉妹のためなれば男子の中にまざりて出來得る丈ヶは熱心に働く所存にて御座候兄姉願くは妹の爲めに祈られん事を切望致し候。

○婦人會　當地先きに山崎縣知事の夫人主となり婦人會を設立せられし事のありしも奕服會なりしためにつぶれて今は有益なる婦人會なし故に小妹二三の姉と相談致し（信者不信者を問はずに）不日に此會を創立する積りにて御座候尤も目下教會にはミス、プレストンの婦人會ありて十四名も會員あるべし、又市川、韮崎、玉幡村等にも各會ありて同樣の人數あるなり編物を教へまた福音を說かれ居り候。本日は大雪を冒して三里半ある韮崎の婦人會へ洋人及牧師等と共に參り候會者二十餘名なりしがよき集りなりき文學上の思想に乏しき事、文化に後るゝ事は驚ろく計りに御座候。

○女子部　當縣會にては此度師範學校女子部を廢する事に議決す此れ地方稅にて四年間養ひ置くも卒業後二ヶ年縣下の爲めに働くのみにては經濟上に不益なり且卒業生の品行正しからずして人の信用なきと從來の習慣にて教員には女子よりも男子の方賣れ口のよきと三ツの原因ありての事なるよし併し知事果して此を認可するや否未定なり目下女子師範生徒十三名ありもし之を廢するとせば中以下の女子は志あるも勉學するを得ざる不幸あるべし甚嘆息の至りに御座候。

女報

○女官位階を進めらる　正六位千種任子、同小倉文子は何れも從五位に陞叙せられたり。

○大和きよ子の慈善　下谷區黑門町十七番地大和きよ子は去る十六日淺草万年町の木賃宿万年屋方に赴き同家止宿の窮民五十二名に米、鮭、煙草、燒芋、漬菜等を澤山に施與したるよし。

○今治婦人俱樂部　は今治教會婦人の發起にて其の附屬として夜學會の設けあり目下生徒の數は六十余名にして英學、編物等を教授す會長は山本愛子にして幹事は柳瀨来子、柳瀨ひさの子、正木梅野子、太田光子、堀光子等にして會員總數は一百餘名なりと云ふ。

○堺婦人會　は堺教會の婦人の團結にして設立以來二年の星霜を經しも兎角不振の景況ありしが近時大坂よりギュリキ夫人の每水曜日に同地に趣かれ熱心盡力せらるゝに因り大に面目を一新せる由にて去る廿六日の年會に於て山本くら子を幹事に角田いく子を書記に當撰せりと云ふ。

○婦人傳道會　大坂南一致教會内に婦人傳道會の組織あり會長、幹事其他十名の訪問委員等ありて專ら傳道上に働かるゝ由。

○神戸英和女學校　は本年に至り已に百四十五名の生徒を有せり殊に帝國大學にて古典科を講修せられたる星野忠直氏を招聘して和文學の教授を依托せられたる由にて日增に繁盛に赴くと云ふ。

○おさんの友　藤井要造氏の編輯兼發行にて築地一丁目九番地篠田國太郎方より賣出したるおさんの友は日用食物の種類を列擧し且つ臺所の衞生と云へる一項を附記し頗る重寶なる一小冊子なり。

○女子演說　橫濱尾上町五丁目平民黨が會主となり去る十七日同地羽衣座に於て女權擴張の討論演說あり當日の辯士は渡邊直子、川口黑非子、岡濱子、川口梅子、中川幸世子等にして討論題は「廢娼の可否」なりし由。

○神戸幼稚園　神戸下山手通五丁目の頌榮幼稚園は去る十五日盛大なる開園式を執行せられたる由にて内外人二三の祝文演說等ありしと云ふ。

○頌榮女塾　にても亦新たに速記科を加へたり。

○ジョアン、デ、アークとナイテンゲール　此頃佛國のラホンテン氏はジョアンが世に名高き功業は實際ありしとにてあらずとの說を主張するよし。又た江湖新聞にて此頃ろ十九世紀の十傑を公選したるに左の十氏を得たるよし

ダービン。ナイテンゲール。ナポレヲン。西鄕隆盛。ビスマーク。リンコルン。
ゲエテ。スタンレイ。アヂソン。シャンダセン。

週報

○官令　十一日勅令第十一號を以て金鵄勳章の等級式佩用式を裁可公布せらる●十二日法律第九號を以て水道條例を裁可公布せらる同十號にて市町村制及土地收用法に關する訴訟取扱の件を公布せらる同日勅令第十二號にて陸軍武官々等表中追加の件同十三號にて陸軍下士以下服制中改正の件同十四號にて海軍糧食條例同十五號にて海軍在外國學生學資金規則を裁可公布せらる●十五日法律第十一號を以て明治二十二年度會計特別整理の件を裁可公布せらる

○宮庭　去る十二日故森文部大臣の一年祭に附き思召を以て祭粢料を下賜せらる十五日天皇陛下偕行社へ行幸同日皇太子殿下熱海より還御あらせらる

○政治　十二日山縣總理大臣を始め大山、松方、西鄕、後藤、山田、榎本、岩村の諸大臣は登閣して會議を開かる同日陸軍省に於ては旅團長會議あり●十三日山縣伯は各大臣各國公使其他内外貴紳數十名を官邸に招待して晩餐を饗せらる同日自由黨の委員諸氏は評議會を開けり●十四日内閣會議に山縣、松方、大山、後藤、榎本、靑木、岩村の七大臣參集せり同日元老院に於ても會議を開かれたり

○外交　十二日米國公使は内外の貴顯數十名を招きて宴會を開けり●十三日米獨兩公使は露國公使館に會合せり●十四日露國公使は内外の貴顯二十餘名を招待して宴會を開けり

○衞生　十二日内務省に於て中央衞生會を開き膓窒扶斯病豫防消毒心得及營業停止の件を議せらる

○文學　二十日帝國大學法科第十番教場に於て史學會を開かる

○商業　去る十四日東京油小賣商組合は木挽町商工會に於て定式會を開き役員を改撰せり

○新誌　岐阜縣下の濃飛日報は去十三日發行を停止せらる

○雜報　十五日九段坂上偕行社にては盛大なる落成式を擧行せり

女學雜誌第十二卷總目錄

自百七十六號至二百號

社說

明治女學生の亡靈來り謝す 一
小說論畧 二九
愛國の情 五七
婦人及愛國の情 八五
慈善救濟 一一三
婦女子之友 一四一
同(承前) 一六九
女學雜誌は何故に新聞紙條例に遊ぶ乎 一九七
ダイナマイト 二二七
女性亦外事に注意すべし 二二八
堅ろ十一月三日 二五七
政治家、政界家 二八七
美術は國家に大關係を有す 二八八
方今の繪畫者に望む 二九〇
演劇場の感化 三一七
監獄は避病院の如し 三四五
妓樓全廢論 三七三
青年及自由黨 四〇一
勸淫論 四三一
廢娼に關する吾人が決心 四五五
詩人、日本現時の極病處 四五七
明治廿二年女學界 四八三
元旦風朝の感 五一三
都人士の無禮 五四三
神皇正統記を讀む 五四五
姦淫論上 五七一
同中 五九九
同下 六二七
社會改良論は必らずや實際に遠し 六〇二
新聞紙なくんば天下太平なり 六五七
公娼廢後の弊害如何 六五九
憐憫の價値何文錢ぞ 六八五
廢娼論に對する種々の異論 六八九

論說

フレーベル教育要礎 七
一夫一婦の建白に付きて辨ずる所あり 三三
小說を讀む者の心得 六四
小說論畧質疑 九二
申し開き條々 一一七
家犬埋葬の辭ば 一四五
黨派心及び女性の融和力 一七二
西洋國の道德 二〇〇
眞情より出でたる文字 二三二
女學生讀書戒 二三四
皇太子の舊事 二五一
理想的新日本 二六四
婦人矯風會員の勤勞 二九一
婦人白標俱樂部の生質を演べて世上の一疑問に答ふ 二九四
歐米文明世界に於ける一家の狀態を論す 三二二
詩歌と歷史との關係 五五一
基督教男女論 三七八
同(續) 四〇八
人情 四〇五
アンビション(野望論) 四三五
偶感 四六〇
廢娼の議終に已むべからず 四六一
年暮の感 四八六
矯風家、宗教家 四八八
女學雜誌を祝す 五二一
新玉の年のことほぎ 五二三
文學極衰の原因及び其矯正法 五四八
醉沈香を讀む 五七四
日本文學と聖書 六〇三
文學士上批評の性質を論ず 六三〇
眞正の愛國者 六六四
人情論(補遺) 六六五
詩歌を學ぶの功用 六九一

批評

香湖選事 一〇
連山人の妹背貝 四〇
我國婦人女子の地位を論じ併せて歐米婦人女子の狀態に論及す 六八
女子の務 六八
はゝのつとめ 六九
躰育美貌論 九七
コールドスミスを評す(其一) 九七
衆妙之門 一二五
楳謀學 一二五
紅葉山人のやまと昭君 一四八
小說論畧筆者に再問す 一七五
謹んで嗣背に申す 一八〇
露伴子の風流佛 二〇六
天囚居士の小夜物語及双鶴 二〇八
謹んで女學記者に謝辭を呈す 二〇八
如溫武治士の小傳 二三七
近日出色の小說 二三八
東洋の婦女 二六七
篁村先生の當世商人氣質 二六八
石點頭氏のきむすこ 二六九
國華 二九六
南翠外史の隱君子 二九八
紅葉山人の戀山賤 三二五
近体文章の宗を讀みて 三五三
落合先生に答ふ 三八一
藍染の實驗 三八三
柳浪子の殘菊 三八三
和歌は織なりと云ふ說を評す 四一〇
歌舞伎座の俗說美談黃門記 四一二
今の小說界文派 四三七
米國の婦人 四六六
山田君の小說界文派を讀む 四六七
饗庭篁村先生の文章 四九二
柳浪子の花の命 四九四
當世文學の遊模樣 五一七
連山人の梢上月 五二〇
紅葉山人の初時雨 五二一
國民之友新年附錄 五四九
谷間の姬百合 五五〇
女學雜誌新年附錄「蘆の一ふし」 五七七
明治風雜集 五八〇
女學雜誌新年の附錄 六〇六
忘れ形見 六〇七
理査士、格武電 六〇九
小楠遺稿 六三三
新著百種第七號を評す 六三七
英國清教徒記事 六六七
紅葉山人の拈華微笑 六六八
ベルツ氏女子教育上の弊害 六九四

雜錄

天上の鳥、足下の花 一三
伉儷は最好の朋友 一五
先進、後進 一五
考ひたる人を尊むべし 一六
詩想 一七
篋底陳言 一七
きつくても大事ない 一八
あすは大雨南無阿彌 一八
分別のつかぬは夫婦 一八
死にぎわに念佛は厭じや 一八
花心の數 四二
日本此今の子供 四二
女修身いろは歌 四三
人生の失意 四五
人生の行路難 四五
名著作年齡 四六
イちら落た猫 四六
さりとは音い高が四文 四六
首は看板 四六
婚禮の席から欠落 四七
まつ首は眼かつた 四七
古經を懷ふの感 七〇
婚事最とも難し 七一
大簡作僕 七二
室家經逸 七二
婚崩 七三
四大奇書 七三
少川の作 七四
何節も聞あきたと聞けばドツモ大ばらし 七四
鏡は消人 七四
孔明の智惠 七四
石橋がお前丸出し 七五
自動的の英雄、他動的の英雄 一〇〇
大統領ガーフヒールド氏夫人の顔色 一〇〇
男だてが欲し 一〇一
女性と公共國事 一〇二
多忙 一〇三
日本赤十字社錄事 一〇四
吸ひがらから生へた烟草 一〇四
七字の念佛 一〇四
兼房と友禪は明後日 一〇五
無精 一〇五
わるい流行 一〇五
管見二則 一二六
すれもの 一二七
同 一五四
子を思ふ親の伊呂波歌 一二九
故鄕に送る歌 一三〇
歲寒盤 一三〇

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遺言は用ひずはなるまい　一三〇
死なぬ中に忌中　一三〇
殘りが十六文ほど　一三〇
古る木の竹　一三一
人間の務め唯一つ　一五〇
リットンとバーンス　一五一
黄表紙　一五三
三本の毛で大願成就　一五五
百年目　一五五
落ちた錢を拾ふ眼鏡　一五六
鶏の火事羽織　一五六
女風の變れもの　一五八
安んずる處　一八二
英雄何處にある　一八二
演藝者及命婦人　一八二
野菊　一八二
動物を虐待すべからず　一八三
月に對して・　一八四
半日ならずせつかい　一八四
借る時の閻魔顏　一八五
くらやみの車　一八五
さるさりのいはひ　一八五
半分はでかけれ　一八五
寅の年でなくて仕合　一八五
諷刺　二〇九
フランクリンの勇　二一〇
洪水と山林　二一〇
宮島政子を追懷す　二一一
女權伸張表裏　二四〇
婚姻と女權論　二四〇
クロムエル臨終の所感　二四〇
ボルクの最長所　二四〇
踏舞の功能　二四一
涙―涙のみ　二四二
俳諧の五子　二四二
批評家と著作家　二四二
化學者の無慾　二四二
美人化粧に苦む　二四三
田夫及びヂョルヂ王　二四三
アラベラ、ジョンソン夫人の傳　二四四
美說と面忤　二六九
我れ詩人たらん　二七〇
一の小天地　二七〇
スコットの勤學時間　二七〇
接吻　二七一
子なきの歎　二七一
日本最上小說十種　二七二
談話の珠　二七三
雨と林との關係　二七四
文學上の符號　二七五
俳諧を振ひし人、俳諧を滅せし人　二七七
親の遺傳　二九九
母の心持と其乳汁の關係　二九九
俳諧の流派　三〇〇
近時文章家　三〇一
婦女文章論者　三〇一
肺勞の養生法　三〇二
資の佩作　三二九
近姉文章　三三〇
曉子の原因　三三三
元祿の三大家　三三三
フォックスの逸事　三三三
淨錢　三五四
一家內の治安條例　三五五
今後の文明は女の手にあり　三五六
子供の遊ばせ方　三五六
和供の虛弱なるは和獣の罪にあらず　三五七
今の小說家　三五八
給仕の張に付問答　三五九
職工の用心所　三五九
フライ夫人傳　三六[illegible]
メランクソンの逸事　三八五
眠り、足らねば病氣となる　三八六
添乳、添寢は子供を殺す　三八七
木乃伊の秘法其事　三八七
安産の秘法　三八九
男女一對の解　三八九
蜂の刺劍は種々の用を爲す　三九〇
年逝かんとす　四一三
清き英傑リービングストン　四一三
何如にして良人の愛を得べき　四一五
寒氣と女生徒　四一五
乳の飲ませ方　四一六
睡眠、夢、夢行　四一七
奈破崙の言行錄を讀みて其一二を評す　四三八
軍人の生命　四三八
文學上の流行　四三九
花かんざし　四四〇
善惡の木　四四二
自然の美　四四二
近眼の元　四四二
船暈の豫防　四四三
腸チブスに就ての心得　四四四
同　四七二
子供は母の寫眞　四六九
歳暮人生の感　四六八
如何にして良人の愛を得べき　四六九
肺勞の原因　四七〇
五才子文　四七一
ボルテーア龍動市に辱しめらる　四七二
歳暮　四九四
婚姻は演劇之序　四九五
小說は遊戲文字にあらず　四九七
昔の女子は學問があつた　四九八
今の文學者は默せず　四九八
年頭の家族の樂　四九九
年始の詣　五二八
一年の老人　五二八
女生徒に薙刀を教ゆる事　五二九
イカツイ　五三〇
羽子板　五三〇
縫針の習ひ方　五三一
一月の養生　五三一
ウイリアム、ウオルヅウオルス傳　五三三
同（續）　六七五
クリスマス對話、姉と妹　五三四
日本の菓子　五三六
婦人洋服の害　五三六
ヒアワサの傳　五五一
一月小兒の養生　五五一
父と夫と何れか尊き　五五三
頭痛に色々あり　五五四
孫供よくお聞よ　五五四
孰れか幸、孰れか不幸　五五五
愛情論　五五六
同　五八七
同　六一六
同　六四一
不思議な夢　五五七
七福神圖說　五五七
王の與　五五八
ビスマーク公の私德　五八〇
家內の大藏大臣　五八二
ストーブの事　五八三
文人の遇、不遇　五八四
紐育市長の金言　五八五
着物の色合　五八六
學校醫の切要　五八七
盛物？實？　五八八
感ずべき美談　六一〇
雲峰子に　六一一
食前食後　六一二
菓子改良論　六一二
詩數首　六一三
子供の美談　六一三
よべの夢　六一四
父上今は何處に　六一四
顏を洗ふ譚　六一五
人の長所、短所　六一六
圓朝が落語を聞く　六三八
梅に月茶さへも入らぬ夜なりけり　六三九
ステーブの想出し　六三九
大磯の記　六四〇
新島先生の送葬　六四二
早起の必要　六四五
きよめぬ庭　六四六
同　六七三
同　七〇二
紹相諸公　六六九
母親の美談　六六九
夕ぐれの春　六六九
少女の熱心　六七〇
東京十二大新聞　六七〇
溫故知新　六七一
鏡の功能　六七二
教育と健康　六七三
小兒の衣服及び眠り　六七五
寒暖と食物との事　六七五
閨の怨　六九七
和歌のよみ方　六九八
東京府下名醫の栞　六九九
節分の事　七〇〇
野菜食品の辯解　七〇一
小兒の食物　七〇三
雨水と雪水　七〇四
惡しき空氣子供を殺ろす　七〇四

女學雜誌第二百一號附錄

兒　籃

駱駝乘アリーの話し　一九
同(續)　四七
同(續)　七五
チャーレーの強膽(上)　一〇一
同(中)　一三一
同(下)　一五六
船長の話し(上)　一九一
同(下)　二一四
人形の怪物　四九九

史　傳

チャアレス、ヂッケンス傳(其三)　二〇
同(其四)　五〇
同(其五)　七六
トマス、カーライル傳　一〇五
フアンシエープ夫人の傳　一三二
マダムローランドとカンテツトの交　一六〇
ルシー、ハッチンス夫人の傳　一八六

小　說

冷熱記第三章　二二
同第四章　七八
同第五章　一三四
賢才子(下)　四八
母猿一叫　一六三
お向ふの離れ　一八八
すみれ(一)　二一五
同(二)　二四五
同(三)　三〇四
同(四)　三三五
伊太利の佳人第一回　三六一
同第二回　三九一
同第三回　四二〇
同第四回　四四六
同第五回　四七五
同第六回　五〇二
イナック、アーデン物語　五五八
同(續)　五八九
同(續)　五一七
同(續)　六四七
同(續)　六七六
同(續)　七〇四

寄　書

宮島政子の死を弔ふ　二六
北郡散士の流轉及び凡神論、懐疑論　二六
婚姻の性質及其目的　五二
林中清流　五三
誤り易き言語(上)　八二
同(中)　一一一
同(下)　一三八
一片の老婆心　一六二
偶言二則　一九二
南黎先生は明治文學の一大美觀　二一七
筑前の女六哲歌　二一八
女子の服裝の歌　二七七
池袋の清風子の歌　三〇七
今日の作文　三〇七
禿雜錄　三六四
同　三九三
御代の春　三六四
謹で教を理想的新日本筆者に乞ふ　三九二
歌舞伎座の見物　四二二
辨妄　四二三
小說家?傑作家?　四二三
俗說美談、黄門記に就きて　四四九
女子の長所　四七八
發賣を禁止されたるもの　四七八
婦人改良を論ず　四七八
感ずる處を記して明治二十二年を送る　五〇四
賢女の爲に泣く　五三七
兒ヨハンに與ふる書　五六〇
廢娼の事に就きて　五六二
殖産慈善家片岡鶴齡の傳　五九二
先づ廢妾より始めよ　六一九
偶感六則　六二〇
新島襄先生の遺訓　六五〇
新島君の逝去、婦人白標倶樂部の好意　六七八
文學者と法學者　七〇六

開　書

謹んで我敬信する嚴本の君ならびに世の諸姉に伺ひまつる　九一
千之女史の問に答ふ　一三八
鈴木金松氏の書狀　一九四
全國有志懇親會に送る書　二一九

忘るゝ勿れ女學雜誌記者よ　二四八
女學雜誌に物申さん　二七九
高等女學校前教頭閣下　二七九
女學子に寄す　三〇八
女學雜誌記者に呈す　三三九
田村武治の君に同意　三六五
水林問題に付きて　三六五
男女多少、家族大小　三六五
文學上の符號に付き　三九四
女學雜誌に付きて　三九四
こゝもさ惜し借用いたし候　四二八
記者に書を寄せて精神的姉妹の媒を望む　四四九
女學記者に寄す　四七九
府會議員に寄するの書　五〇五
廢娼後の仁政に付きて　五三八
文章家の有無　五六三
御相談の事　五六三
禁酒下宿　五九三
廢娼會　五九三
天保親父さん　五九三
神田、麴町、麻布、芝、築地　五九三
熱淚以て清淨なる都人士に訴ふ　六二一
女學先生及び他の方々に報す　六二一
古今小說十種　六二一
願ふを四條　六五一
各國婦人會に告げ參らす　六五一
古著百種休刊につきまして　六五一
食客と獻身者との事　七〇七
女學雜誌の一失　七〇八

時　事

孟蘭盆、盆踊　二七
一夫一婦の建議　二八
閑日月　二八
濁世　二八
高等女學生　二八
寡夫及び寡婦　二八
啞然たる者三　五四
印刷局王子工場患者統計　五四
婦人矯風雜誌の新編者　五五
東京開市三百年　五五
蛙、雀、地震、山林　五五
清國人の義捐　五五
公園　五五

佛國女權議會　五六
慈善救濟　八三
年中の勉强時　八三
小野小町一千年祭　八三
佳人の寶劍　八三
驚くべき女子教育の進步　一一一
レビツト夫人　一一一
亡き母の遺志　一一二
裸婦人の書　一一二
婦人雜誌の不德　一一八
猥褻の論指南　一三八
民序數の新設　一三九
盲人政談演說會　一三九
盲人就產協會　一三九
日本演藝協會　一三九
孤兒院　一三九
公閑改良の事　一三〇
清人花を摘さんとす　一四六
世上化々、貧個浪遊　一六六
支那婦女修養所　一六七
普通平和協會　一六七
万國禁酒會議　一六七
第二レビツト夫人來らんとす　一六八
人物論　一九五
婦人傍聽者　一九五
文學者の德義　一九五
女性は買物の長者なり　一九五
大日本進德會　一九六
女學雜誌の改進　二二〇
其天職如何ん　二二〇
伊藤伯の辭職　二二〇
人安んぞ痩さん哉　二二一
三政黨三對　二二一
改進黨に忠告す　二二一
今日の政黨　二二一
條約改正の問題　二二二
親分と子分　二二二
之を推述せよ　二二二
日本婦女英國女王に呈書す　二二三
無禮なる外國人　二二三
公認教　二二三
正々堂々たる優勝劣敗　二二三
慈善の弊　二二四
慈善の濫用　二二四

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第二百一號附錄

慘憺たる悲惱　一二四
義捐音樂會始末　一二四
福迫遊一郎氏以下有罪　一二五
閑達居士の文章　一二五
鹿鳴館演習を評す　一二五
同胞諸兄姉を和む　一四九
沈思三省　一四九
目的さ手段　一四九
泥棒さ暗殺者　一四九
琉黑に入れ　一四九
兇徒の死沐　一四九
嗚呼幾多の人才　一四九
大賢的北堂　一四九
大賢貞夫人　一五〇
女子靑年會　一五〇
事小なるに似たれども甚だ容易　一五一
の次當に害あり　一五一
上野の馬見所に注目せよ　一五二
霧中の燈柳　一五二
油島さ日本人　一五二
加藤弘之氏の進化論　一五三
莉劍より術數を得べきか　一五三
黎人乎　一五四
大學生　二八一
天上大亂、天下太平　二八一
政海巡遊の旅日記　二八一
育人大衆を傑す　二八一
謹んで三條公爵に謝す　二八一
中止後只一の途　二八二
女學雜誌の主義　二八二
政黨及婦人　二八二
吾人が地位　二八二
女性衷情　二八二
婦人禁酒會　二八三
敢て一言す　二八三
國會及婦女子　二八三
政黨並に離緣のこと　二八四
細君　二八四
矯正成　二八四
宮中農家あり　三〇九
元治の昔し、明治の今日　三〇九
榊公さ伊藤伯　三一〇
靑年の煩悩　三一〇
富士山傍の新ダミエン　三一一

滿場の僧侶諸君！　三一二
福田會育兒院　三一二
秋菊　三一二
紅葉　三一三
蝶夫人　三一三
狀雜俊寥　三一三
滿目の悽慘　三三九
眞正の紳士　三四〇
月々雜鳴を聞く　三四〇
速記法　三四〇
女子法學博士　三四一
小說及び小新聞　三六六
娼樓全盛の大勢　三六七
不德の罰暗々　三六七
某自殺す　三六八
櫻美人を葬る　三六八
攻嵩き見世物　三六八
新聞紙さ義捐金　三六八
頑の懲さ聞く　三六八
林次大氏　三六九
有瀬事件報告　三六九
日曜說々　三六九
事項流行　三六九
劇客等々　三六九
天高鐘を鳴らす　三九六
女典獄　三九六
著寃　三九六
紙上　三九六
世間　三九六
役人なくんば天下太平なり　三九六
風俗壞亂の活人畫　三九七
政黨の競爭に娼妓を要す　三九七
兒島高德　四二五
岡山孤兒院　四二五
目下の美術詩會　四二五
繪草紙店の撰選　四二六
東京府會に廢娼論起る　四二六
群馬縣會　四二六
文學極致　四五一
同　四八〇
濁水淸報　四五一
淸濁如何　四五一
彼の紛隆なる政黨　四五二
廢娼會　四五二
おいらんの繪　四五二

女性速記　四五三
さまざま　四八一
歲暮迷惘　四八一
警島の女子教育　四八一
濁界淸報のひゞき　四八一
同　五〇八
クリスマス　五〇六
深く暴言に謝す　五〇六
東京府會の議決　五〇七
天眞淡々　五〇八
責任論　五〇八
大臣の責任　五〇八
誰選者に惡める古者　五〇八
家齊に對する慈善　五〇九
内閣改官制の變動　五四〇
潛勢力　五四〇
新聞社の内閣運動　五四〇
議論、批評、實行　五四〇
李に誓つて衣服を更ゆ　五四〇
條約改正の成行　五四〇
攻撃に花を見る　五四〇
今年の女學會　五四〇
諸大臣の模樣　五四〇
決鬪を禁むる　五六五
廿士接被の宴　五六五
月照さ相撲の商業　五六五
落華の末路　五六六
俊則君さ博文伯　五六六
バアテル氏及報知記者　五六七
板垣伯の喪言　五六七
去來何れか榮轉　五六八
蜘蛛退却下　五六八
世界週遊競爭の婦人　五六八
女學者さ政治　五九四
女學的政黨　五九四
黨派瓦解　五九四
日本軍樂評　五九四
櫻樹森々鳥啼　五九五
三大不思議　五九五
年始狀を返却す　五九五
娼妓政黨員を招く　五九五
聲噫々　六二二
北海離宮　六二二
英國女王陛下、婦人白標倶樂部　六二二
五丈原頭の孔明　六二二

日本人増殖の策　六二三
武藏野　六二三
矢野龍溪君　六二三
看護婦　六二四
廢妾論、廢娼論　六二四
娼妓知事の名代たり　六二四
菊子　六二四
加藤博士の進化論　六二四
女子參政權　六五二
月次御題　六五二
太平の閑人　六五二
今後の同志社大學　六五三
二月十一日　六七九
又二月十一日　六七九
名學　六八〇
議員候補爭者　六八〇
國家太平の師　六八〇
僧侶の鑑　六八〇
君子は關の如し　六八〇
自由教育、自治教台　六八一
某地の人　六八一
ゾラの小說　六八一
愛媛縣知事娼妓を見る　六八二
佛教家及廢娼運動　七〇九
下宿事業　七〇九
授産事業　七〇九
衛生事業　七一〇
矯風事業　七一〇
縫濟ハンケチ　七一〇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○文部大臣海軍中將從二位勳一等子爵榎本武揚公題字
○醫科大學産科學婦人科學教授醫學士濱田玄達先生校閲
○醫科大學小兒科學教授醫學士弘田長先生
○帝國大學大學院學生醫學士三島通良先生編述

はゝのつとめ

各女學校尋常師範學校等育兒科敎科用
醫科大學第一醫院産科婦人科及小兒科病室用參考書
文章は平假名つき談話體
石版木版畫入日本紙刷日本綴美本

親の卷 婦人懷妊出産より七夜中養生法 定價金三拾錢 郵税二錢

子の卷 小兒分娩より學齡兒となる迄の養育法及敎育法 定價金四十五錢 郵税二錢

本書は古今無比の母子衛生書にて、出版以來特の外の好評を博し、非常の賣高を爲したるのみならず

御傳獻を以て
皇后陛下の御覽を賜はり
畏れ多くも榎本文部大臣の

前代未聞の榮を得たる書なれば其完全なる事は申迄もなく苟も人身衛生の根源たる母子衛生法を理解せられんとする貴婦人君子は必ず一部を購ひて國家を利し己を益し給へ、右は殘本僅少になり候まゝ至急御申越しを希ふと云爾

發兌書肆

東京 日本橋區通三丁目 丸善商社書店
同 區馬喰町 英蘭堂島利
市 本郷區春木町 同 支店

日本橋區通油町 中央堂書店
神田區表神保町 中西屋邦太
麴町區富士見町 女學雜誌社

省認可

東洋英和女學校廣告欄

廣告

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地 **東洋英和女學校**

●正教新報

第貳百廿壹號二月十五日發行 壹冊郵税共金四錢五厘

論說 明治廿三年二月十一日の所感○傳敎と敎育○特別寄書○宗敎の國家と皇帝とに於ける關係 **雜錄** 自殺の原因○人生旅行說○神學士ウラディミル、ゲッラ師司祭奉職五十年期●詞藻●文苑○天祐皇朝頒○舊約百詠○其他詩歌數首●漫筆○宗敎條例發布の風說○一偉人の永逝に對する佛敎家の所感○佛法耶滅法耶○嘆乂嘆○積極的の道德を擇べ○其他數件 **雜報** ●日本正敎會記事數件○俗事に狃奔する佛者○佛敎界の標準○廢娼論の勢力●外報巴里に於ける日曜休日の事に就いての會議○埃及に於て預言者耶利米の遺物を發見せり

發行所 東京市神田區駿河臺北甲賀町十三番地 **愛々社**

●廢娼演說

傍聽無料

辯士 **田村直臣君**外二名

本日午後六時より麴町區中六番町基督敎會堂に於て開會

二月二十二日

番町女子青年會

社告

鈴木弘恭先生講述

百人一首講義

二百頁中本美裝 郵送料四錢 上等製本五十錢 普通製本三十錢

右小倉百人一首を鄭寧に面白く極く分るやうに解き明かし特に初學にても自づから歌の詠めるやうに敎ゆる詠歌手引を添え三月初旬より發賣仕候間御注文奉願上候

通信女學第一卷再版 三月中旬出來

第一卷悉皆出切候處ろ注文尙ほ續々有之に付至急再版に着手す、但し再版部數は自から限あることに付御入用の御方は可成く早く御申込被下度候、然らざれば部數不足を生じ又々御需めに應じがたき儀有之候かと掛念致候。

定價

一冊。	六錢	郵税。五厘		（但府內無郵税）
十冊。	五十八錢	郵税。五厘		（同前）
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓五十六錢	
一年分	二圓六十錢	府外は	二圓八十六錢	

廣告

一行	一回	（廿七字詰）	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德な事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

發行所 東京麴町區富士見町二丁目一番地 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

廣告

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達善良なり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

●正教新報

第貳百廿壹號二月十五日發行　壹冊　郵税共金四錢五厘

論説　明治廿三年二月十一日の所感○傳教と教育○特別寄書○宗教の國家と皇帝とに於ける關係

雜錄　自殺の原因○人生旅行説○神學士ウラディミル、ゲッラ師司祭奉職五十年期●詞叢●文苑○天祐皇朝頌○舊約百詠○其他詩歌數首●漫筆○宗教條例發布の風説○一偉人の永逝に對する佛教家の所感○佛法耶滅法耶○嘆乂嘆○積極的の道徳を擇べ

雜報　●日本正教會記事數件○俗事に狂奔する佛者○佛教界の標準○廢娼論の勢力●外報○其他數件

巴里に於ける日曜休日の事に就いての會議○埃及に於て預言者耶利米の遺物を發見せり

發行所　東京市神田區駿河臺北甲賀町十三番地　愛々社

●廢娼演説　傍聽無料

辨士　田村直臣君　外二名

本日午後六時より麹町區中六番町基督教會堂に於て開會

二月二十二日

番町女子青年會

社告

鈴木弘恭先生講述

百人一首講義

二百頁中本美裝　郵送料四錢　上等製本五十錢　普通製本三十錢

右小倉百人一首を鄭寧に面白く極く分るやうに解き明かし特に初學にても自づから歌の詠めるやうに教ゆる詠歌手引を添え三月初旬より發賣仕候間御注文奉願上候

通信女學第一卷再版

三月中旬出來

第一卷悉皆出切候處ろ注文尚ほ續々有之に付至急再版に着手す、但し再版部數は自から限あることに付御入用の御方は可成く早く御申込被下度候、然らざれば部數不足を生じ又々御需めに應じがたき儀有之候かと掛念致候。

定價

一册。六錢　郵税。五厘（但府内無郵税）

十册。五十八錢　郵税。五厘（同前）

半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓五十六錢

一年分　二圓六十錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

一行（廿七字詰）　一回　前金拾錢

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受くべし

女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

發行所　東京麹町區富士見町二丁目一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留　巖本善治

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　森田豐